

2160

325

32

十三佛由來

不動明王

藤井文政堂發兌

十三佛由來目次

第一 不動明王
第二 釋迦如來
第三 文殊菩薩
第四 普賢菩薩
第五 地藏菩薩
第六 彌勒菩薩

第七 藥師如來
第八 觀自在菩薩
第九 勢至菩薩
第十 彌陀如來
第十一 阿彌如來
第十二 大日如來
第十三 虛空藏菩薩

叙

余夙慨我宗徒之多，日夜所讀誦之經，
 典猶且不領其為何，徒招蛙鳴之誹輩，
 之不尠，曩者著述般若理趣經和解一
 篇，以公于世，輒近有書肆文政堂主之
 乞增補許之，改版頃又更需十三佛由
 來之編述，乃記其大要與之，若夫欲此
 著之詳悉，固不一朝夕之事，然猶且有

之經 3
 內交

足以爲啓蒙之一助乎、何幸如之、茲十
三佛由來之版成、叙一言云

明治四十年九月

編者誌

叙

十三佛由來

僧正 廣安 恭壽 述

發端

さて十三佛のことは眞言宗の人は誰れにても拜み祭らぬものごとくも
なく、殊に死亡にてもありたるときは初七日より二七日三七日四七
日五七日六七日七日一週忌三週忌七回忌十三回忌十七回忌二十五
回忌三十三回忌乃至五十回忌百回忌百五十回忌等の追福する中に初
七日より三十三回忌までの守本尊として祀ることはありますが然
らば全體十三佛の御由來はいかゝなりや又其御一尊御一尊の御誓願
や御靈驗はいかゝなりや等のことに至ては知りし人は數多の人の中
にても眞に少き狀況であります諸佛菩薩の御誓願は大慈大悲にして
智識あるものを助け玉ふばかりでなく一文不知の尼入道までも救ひ

發

端

玉ふの御思召否な智慧あるものよりは寧ろ智慧もなく行もなく劣慧愚鈍強剛難化のものを何こかして救ひ助けんと種々御工夫の上へ衆生の願ひ衆生の慾に従ひて何れの道よりしてなりと助け参らせんご成し下さるゝが佛菩薩の御誓願であるから假令十三佛の御由來がいかにや御一尊御一尊の御誓願がいかにや其一々のことは知らねども唱へる眞言の功力や供養する信心をば必ず御受納下さるゝに違ひはない然れども是は致方もない上へから言ふことにて可成なれば假令聊かなりとも其御由來御功德等を知り其心して拜み供養せば尙々功德あることは言ふ迄もないことであるから私も一には信心の人々の信心の杖ともなり又自分の報徳謝徳と心得て聊か茲に此講話を致すこととなりました

そこで先づ十三佛總じての由來を一寸御話致しませう

十三佛由來

十三佛の由來を御話致しますに何れ次々へ出て來ることはあります
 が先づ初に十三佛の御名を掲げて見ます、一には不動明王二には釋迦如來三には文殊菩薩四には普賢菩薩五には地藏菩薩六には彌勒菩薩七には藥師如來八には觀自在菩薩九には勢至菩薩十には彌陀如來十一には阿閼如來十二には大日如來十三には虚空藏菩薩是が十三佛の御名であります、處が茲に言ひ置きたいことは十三佛にて共に佛といふてありますなれど、其御一尊御一尊に當て見れば此十三の中には如來と云があり明王と云があり又菩薩と云ふがありますに其れを一口と佛と云はいかにやと云ふ疑の起ることもありますゆへ一寸茲に辨解して置きますが一往は明王とは天部なり菩薩とは十界の中には第九界で第十の佛界とは位に上下があるよふに思はれますが、

此等の菩薩方や明王方は胎藏曼荼羅界の聖衆とて畢竟大日如來の大
慈大悲より出でさせられたる變化影像の御方にて共に我等衆生を助
けんとしてそれ／＼の御誓願を立て攝化し玉ふことなれば更に上下
尊卑の隔はありません只御誓願の異なる邊にて御身分の恣を色々
して居り玉ふばかりであります次に十三佛の出據を尋ぬるには十
三佛を其まゝ説かれし御經もありません或ひは梅尾明惠上人が夢中
に十三佛が雲に乗して來り玉ふことを感得せられしを其繪畫にして
祀りしものなりとも云ひますが併し源三十三王經の説に依り後の三佛
を加へ亡者死亡後初七日なり三十三年忌までの守本尊に當て辨めた
もの云ふが餘多の説であります其中初の十尊は十王經の十王の本
地佛にして亡者死亡後中有にて死有と生有との間にありて未だ次の
生處の定らぬ位に十箇の廳を設け亡者生前の罪業を調査して夫々裁

判し次の生所へ送り届くるものあり之を十佛と云ひます然るに此十
王は取も直さず十三佛の衆生攝化の爲の方便假托の化身にして假り
に猛惡忿怒の身を示し罪業の衆生を威嚇し玉ふと雖も其御心は大
慈大悲の三時に住し常に衆生悲愍の涙に暮れ盡させ玉ふ御尊體であ
り、ます夫故或は父或は母の此世の縁盡き果て、迷途黃泉の客となり
し其時に後に残りし孝子孝孫の人々にて父の爲め母の爲め甚と懇に
眞心を捧げ初七日より始として忌日々に怠らず此十三佛を供養し
各々本尊の御眞言を誦持し追福廻向し參らせんには十三佛大悲の光
明に照されて是迄猛惡忿怒の形想にて亡者を呵責せし大王も忽ち十
三佛の尊影を變現して大悲大慈の御手を垂れ縁ある淨土へ御手引下
さるゝこと更に疑はありませんそれゆへ亡者死しての後ち七々日の
間は勉めて懇に追福を營むべしと云ふは此意味からであります其他

十三佛各尊一々のことは次を逐ふて委しく御話すること、致します以上真にあらく、十三佛の所由を講話せんとするに先て十三佛五體に付てのここだけ御話致しました是より十三佛一々別に分けて講話致します其中先つ不動明王より始ます

第一不動明王

さて第一番に不動明王の御由緒を講話せん講話の次第を四科として御話致します

第一本尊の名義體相

第二御經と眞言

第三誓願と功德

先つ初に不動明王の名義を御話致しますれば不動尊の名義に五種あります其中の一は常住金剛さて此明王は吾人御互の本来本具の淨き菩提心を常住に固く忍持して加護し玉ふ意であります二に聖無動と云ふ是は我等一切衆生の日夜に起る慳貪邪見煩惱雜染の生死海中の

相を其儘に改め更ゆることなく直に兩部曼荼羅の諸尊聖衆と同位なりとては加護下さる意であります三には風動是一切衆生の出入の息過去世より現世々々より未來と遷り移りて散動窮りなき處を御護あつて加被し下さる意であります四には風童此明王は已成の尊位さて久遠の昔に在て已に佛の悟を得玉ふ尊き御方なれども衆生濟度の御方便より奴僕垂髮忿怒の貌を現し童子散動の形を以て衆生を加護し玉ふの意であります、五には不動此尊は速疾三昧に住して四魔を降伏し寂靜不動の意であります然るに此五種の名の中に初の四は胎藏界本覺下轉の義に依て御名け玉ふなれども第五の不動の名は金剛界始覺上轉門の邊に就て名け玉ふものにて此五種の名は取も直さず金剛界胎藏界兩部曼荼羅尊の徳を合稱せし總持の御名なれども今は五つが中の不動の御名號にて呼聲となることであります經には

有_レ大威怒王_二名_一曰阿利耶阿闍羅拏多尾地阿羅惹_二は御名_一を掲げられてあります次に御尊體のことは申す迄もなく讀者諸君の知らるゝ如く此尊は忿怒拆伏の相に住し身より火焰を起し右の手に刀劍を握り左の手に索を持ち大磐石の上に坐し玉ふ甚と畏き御姿に御坐せし尊にして是は大日如來の教令輪身にて拆伏を表として出て玉ふ尊であります然るに諸佛菩薩には其姿にそれ〴〵皆な表示して其尊々々の御内心をは御姿やら御持物やらの上に示されてあることなるか今此明王の御姿や御所持物に付ては如何なりやと云ふことに付て是より御話致しましやう先づ御形の總體に付て申すれば總て佛菩薩は大慈悲を以て衆生を濟度し玉ふこと也へ同しことなれば慈悲忍辱の甚と愛らしき懷かしき姿にて教化し玉ふが御本意なれども中には此慈悲忍辱の姿には慣れ強剛難化して所謂酔でも葯蕪でも行かぬ者が

あります也へ是等のものを濟度せんとは勢ひ猛惡忿怒の相を爲し之を威嚇してなりとも其功を遂げねばならぬこと也へ今此尊は斯くも恐しき姿を爲し玉ふことであります又身より火焰を起し玉ふことは是は火生三昧にて火は能く物を焼き掃ふの徳あるものにて此尊の御内證は一切衆生の煩惱雜染むさいきたない邪魔物を焼き拂ひ一切衆生をして身なり心なりをして安樂を得せしめ玉ふを徳とし玉ふが故に其心の標示に火焰を起し玉ふことであります次に黒色を爲し玉ふは是れ青黒色は無明無邊際にて衆生の根本無明の煩惱の窮め果てしなきものを此尊は威力に依て摧破し玉ふ徳を顯し玉ふものであります次に刀劍を持し玉ふは劍は物を裁斷する徳あるもの然るに此尊は智慧の刀劍を以て貪瞋慢疑の煩惱を斷ち破り玉ふが故に其徳を顯はして刀劍を持し玉ふことであります又索を持し玉ふことは是れも同し

煩惱邪見放逸の衆生を大悲の索を以て繫縛して正道に歸せしめんご懲誠し玉ふ徳を顯はされたるものであります次に磐石を座とし玉ふは是れ一切衆生貪瞋邪見の煩惱の重きこと磐石の如くにして此尊は此衆生重障の煩惱の磐石を坐とし起さしめざるを徳とし給ふか故此磐石を以て坐とし給ふことであります其他額の皴のことは一切衆生の生死海中の水波は日夜に流轉して暫くも休まざることを慙て其生死水波の相を御面相に浮かべて示し給ひし大慈大悲の御内證の御心を示し下されたものであります又上下の齒を噛み違ひ給ふことは下の齒は上に向ふて上求菩提とて上に向て菩提を求め下の齒は下化衆生とて下も下界に向て一切衆生を化度し給ふ義にて此上下の齒が噛み違ひ入り合せるは取も直さず生佛迷悟不二の徳を示し給ふ表示であります頂上蓮華の事此蓮に開敷とて開いたものと未敷とて未だ開

かぬものとの二た通があります今此尊は胎藏因曼荼羅の教令輪身なれば未敷蓮華なるべきに開敷蓮華を頂き給ふことは如何と云ふに是れ胎藏因曼荼羅の當體即金剛界果曼荼羅の義に依て迷界の吾人衆生も本來本覺の理身にして久遠實成の佛身なれば開敷蓮華の當體なるが故に此義を顯されたるものであります

第二御經と眞言

さて以上は不動尊の名義を體相とを御話致しましたか是より御經を御話することに致ましようソコで御經は異本多しと云ふことであります私が私は金剛手菩薩說般若加羅三藏の說にて聖無動尊大威怒王秘密陀羅尼經と云ふを和譯して左に出ましよう

聖無動大威怒王秘密陀羅尼經

爾の時に毘盧遮那大會の中に一人の菩薩摩訶薩います名けて金剛手と曰ふ妙吉祥菩薩と俱なりき此の金剛手は是れ法身の大神なり是の

故に普賢と名く即ち如來より金剛杵を得たり其金剛杵は五智の所成なり故に金剛手と名く又妙吉祥菩薩は是れ三世の覺母なり故に文殊師利と名く是の如き菩薩は衆生を度せんが爲めに菩薩の身を現し戒定惠解脱々々の知見を成就して能く諸の陀羅尼門に通達せり其心禪寂にして常に三昧に住し衆魔を降伏して正見に入れ大智慧を得せしむるに障導あることなき能く衆生に隨て大法輪を轉す解脱の風を吹て衆生の煩惱を除く大法の雨を降し衆生の心地に澍て善根の種を殖へしめ亦能く秘密の藏を具足せしむ其心自在にして或は多身を現し復た多身を合して以て一身と爲し衆生の願に隨て能く悉地を與へ宿業の願を以て衆生の病を療やす是の大菩薩は五髻の冠を戴て五種の智慧を顯す智慧日月の如くにして諸の暗冥を照す常に人天に恭敬せられ大法の船を設け普く苦海を度して彼岸に到らしむ心傾動なく塵

垢に染ます能く衆生を誘ふて妙色を見せしむ是の如くの功德甚深無量なり設ひ多劫を経て讚すとも盡すこと能はず是の二菩薩は如上の殊勝の功德を成就し給へり是に於て金剛手菩薩火生三昧に入り其光普く無邊の世界を照す火焰熾盛にして諸障を焚燒す内外の魔軍恐怖馳走して山中に入らんと欲すれども遠く去ること能はず大海に入らんと欲すれども亦去ること能はず聲を擧て大に叫び唯佛の所に到て救護を請ふ魔業を捨て、大悲心を發す釋提桓因梵天王等深く禪定の業を捨て、此處に來入し天部八部皆悉く菩薩の所に來至して禮を作して坐す 爾時に金剛手三昧より起て妙吉祥菩薩に告て言く大威怒王あり名けて阿利耶阿闍羅拏多伽多尾地耶阿羅惹と云ふ是の大魔王大威怒王大威力あり智慧の火を以て諸の障礙を燒き亦法水を以て諸の塵垢を漱く或は大身を現して虚空の中に滿ち或は小身を現し

て衆生の意に随ふ金翅鳥の如く諸の毒惡を嗽ふ亦大龍の如く大智の雲に起して法雨を灑く大刀劍の如く魔軍を摧破す亦羅索の如く大力の魔を縛す親友の童子の如く行人に給仕す其心驚かず不動定に住すれば是の大明王は其所居無し但た衆生心想の中に住す所以いかなるなれば虚空廣きが故に世界無邊なり世界無邊なるが故に衆生界廣し衆生界廣きが故に無相を以て體とし無相にして相あれば行者の意に随ふて其形體を現す其身有にあらず無にあらず因にあらず果にあらず自に非ず他に非ず圓に非ず長に非ず短に非ず出に非ず没に非ず生に非ず滅に非ず造に非ず起に非ず爲作に非ず坐に非ず臥に非ず行住に非ず動に非ず轉に非ず閑靜に非ず進に非ず退に非ず安危にあらず是にあらず非にあらず得失にあらず彼にあらず此にあらず去來にあらず青にあらず黄にあらず赤にあらず白にあらず紅にあらず紫にあ

らず種々の色にあらず唯大定智慧を圓滿して具足せざるこそなし即ち大定徳の故に金剛の磐石に坐し大智慧を以ての故に迦樓羅焔を現し大悲徳を以ての故に種々の相貌を現す其形も青黒にして暴惡の相に似たり智慧の劍を執て貪瞋痴を害し或は三昧の索を持して難伏の者を繫縛す常に天龍八部の爲めに恭敬せらる若し纒に是の威怒王を憶念すれば能く一切の障離を作す者をして皆悉く斷壞せしむ一切の魔衆敢て親近せむ常に當に是の修行者所住の處を遠離して一百由旬の内に魔事及び鬼神等あることなかるへし時に金剛手最勝根本大陀羅尼を説て曰く

なりまく。さらばたゞぎやていびやく。さらばもけいびやく。さらばたゞらた。せんたまかろしやだ。けん。ぎやきくさらばびきなん。うんたら。たかんま

纒かに是の眞言を誦すれば大智慧を出して一切の魔軍を焚焼す三千大千世界咸な大忿怒王の威光に焚焼せられて大火聚と成る唯十地の菩薩等と一切の佛土とを除て諸の冥衆を燒き後に法樂を以て安穩を得せしむ時に金剛手偈を説て言く

若し此眞言を持せば、無傾動を成就して、諸の往の苦を燒き大魔王を降伏せん、所求の一切の事、持に隨て成就を得ん、十二天等の常に來て加護せん、東北の伊舍那、東方の帝釋天、東南の火光尊、南方の焰魔天、西南の羅刹王、西方の水雨天、西北の吹風雲、北方の多聞天、上方の大梵天、下方の持國天、日天照衆闍、月天清涼光、是の如き大力の天、而も來て彼を圍繞せん、或は明王の伏を蒙り、還て敬て擁護を作す、使者矜羯羅、及與制吒迦、俱利迦龍王、藥師捉使者、是の如き大眷屬、或は隠れ或は顯はれ來て、修行者に奉仕

すること、世尊を敬ふが如くならん、若し大根の者の爲には、聖者の忿怒を現し、根性中根の者は二童子を觀ることを得ん、若し下根の行人は怖を生じ見ること能はず、是の故に大明王、爲に親友の形を現し給ふ、是の如く根性に隨て、而も大利益を作し漸々に彼を誘引して、阿字門に入らしむ

爾時に金剛手菩薩是の偈を説き已て普く大衆生を觀て之に告て言く喜ひ哉々々々大會皆な宿善に由るか故に今來て是の如き明王及ひ大力の神呪を聞くことを得て若し是の大明王を見奉ること欲せん者は應に捨身修行の法を修すべし復た眞言を説て曰く

なうまくさまんだ。ばざらなん、たらた、あもさや。せんだ。まかろしやな。そはたや。あなや。あそさや。あさんまぎに。うんく。びきなん。うん。たらた

纒かに是の眞言を誦すれば大智慧を出して一切の魔軍を焚焼す三千大千世界咸な大忿怒王の威光に焚焼せられて大火聚と成る唯十地の菩薩等と一切の佛土とを除て諸の冥衆を燒き後に法樂を以て安穩を得せしむ時に金剛手偈を説て言く

若し此眞言を持せば、無傾動を成就して、諸の往の苦を燒き大魔王を降伏せん、所求の一切の事、持に隨て成就を得ん、十二天等の常に来て加護せん、東北の伊舍那、東方の帝釋天、東南の火光尊、南方の焰魔天、西南の羅刹王、西方の水雨天、西北の吹風雲、北方の多聞天、上方の大梵天、下方の持國天、日天照衆闍、月天清涼光、是の如き大力の天、而も来て彼を圍繞せん、或は明王の伏を蒙り、還て敬て擁護を作す、使者矜羯羅、及與制吒迦、俱利迦龍王、藥園捉使者、是の如き大眷屬、或は隠れ或は顯はれ来て、修行者に奉仕

すること、世尊を敬ふが如くならん、若し大根の者の爲には、聖者の忿怒を現し、根性中根の者は二童子を觀ることを得ん、若し下根の行人は怖を生じ見ることを能はず、是の故に大明王、爲に親友の形を現し給ふ、是の如く根性に隨て、而も大利益を作し漸々に彼を誘引して、阿字門に入らしむ

爾時に金剛手菩薩是の偈を説き已て普く大衆生を觀て之に告て言く喜ひ哉々々大會皆な宿善に由るか故に今來て是の如き明王及び大力の神呪を聞くことを得て若し是の大明王を見奉るご欲せん者は應に捨身修行の法を修すべし復た眞言を説て曰く

なうまくさまんだ。ばざらなん、たらた、あもきや。せんだ。まかろしやな。そはたや。あなや。あそきや。あさんまぎに。うんく。びきなん。うん。たらた

眞言を修せん行人は、是の眞言を持誦すべし、身より光明を放て、諸の魔王を降伏し、所求の一切の事、持に隨て成就するここを得べし、是の故に護身と名く、能く恐怖無きここを得、亦眞言明なり、加護住所と名く、諸の恐怖を遠離して常に勝安穩を得、彼の大眞言に曰く

なうまくさまんだ。ばざらなん。たゝらた。あもきや。せんた。ま
 かるしやな。そはたや。さらばびきなん。まかそはしやちせんち。
 しんばめひ。あざらたう。ころたらまや。たらまや。うん。たらた。
 かんまん。

金剛手言く一切衆生意想不同なり是の故に如來或は慈體を現し或は
 忿怒を現して衆生を教化すること各々不同なり衆生の意に隨て利益
 を作し給ふ魔軍を破すと雖も後には法樂を與へ忿怒を現すと雖も

も内心は慈悲なり魔醯首羅の如き者第八地を得て慈善根の力あり應
 に以て之を知るへし是の語を説き已て復た大衆に告給はく若し是の
 如き法を成就せん給はん者は山林寂靜の處に入て清淨の地を求め
 壇場を建立して諸の梵行を修し念誦の法を作さば即ち本尊を見奉て
 悉地を圓滿すべし或は河水に入て念誦を爲し若しは山頂樹下塔廟の
 處に於て念誦の法を作さば速に成就を得ん或は般若經を安置する處
 に於て之を作さば成就すべし是の如く修せん時は其三業を整へて衆
 罪を造らず亦諸餘の惡人に親近せずして諸の護摩の事を作さば速に
 悉地を得ん五辛酒肉を食せずして之を作さば成就すべし偈を説て言
 く 若し能く是行を行せば、功德量るべからず、如法に念誦を
 作さば、即ち大悉地を得ん、行者苦行を修し、或は心想清淨にして
 三洛叉の數滿せば、常に本尊を見奉ることを得ん、法成を驗せん

せば、能く山を移し及び動せしめ、能く水をして逆に流さしめ、意に隨て諸事を作さん、諸佛の土を見んご欲すれば、明王忽に出現して行者を頂戴して、能く之を見るところを得せしむ、何に況や餘の求むる事をや、持に隨て成就を得へし、四惡趣に墮せず、決定して妙果を證せん、是の如くの諸の功德我れ讚すとも盡するご能はじ、唯大聖世尊、能く是の如き法をしるしめせり、爾の時に佛妙吉祥菩薩に告て是の言を作し給はく若し未來世に諸の行人あつて宿福に由るが故に是の如きの明王の名號を聞くご事を得或は復た是の聖無動尊大威怒王陀羅尼經を受持せん者は當に知るへし是の人は横死あるご事なく亦恐怖なし諸天の護持を蒙て諸の障礙なし何に況や上の如く念誦を作さん者をや其福無量なり是の語を作し已て默然として坐し給ふ金剛手の言く善ひ哉々々々大聖の説の如

し是の言を説き已て其本意を遂げ置て本坐に着し給ふ爾の時に大衆是經を説給ふご事を聞き已て各勝位を得皆大に歡喜して信受し奉行したりき
 以上御經を出しましたが是より第二に眞言を御話致します
 ます其中先つ此尊の最勝根本大陀羅尼を御話せば
 なうまく。さらばたゞぎやていびやく。さらばもけいびやく。さらばたゞらた。せんだまかろしやだ。けん。ぎやきく。さらばひきなん。うんたらた。かんまん。
 又眞言に
 なうまくさんまんだ。ばざらなん。たゞらた。あもきや。せんだ。まかろしやだ。そはたや。あなや。あそまや。あさんまぎに。くびきなん。うんたらた。
 又眞言に

なうまくさんまんだ。ばざらなん。たらた。あもぎや
 かるしやだ。そはたや。さらばびきなん。まゝそはしや
 さんばめい。あさらたう。ころたらまや。たらまや。うん。
 かんまん。

又平素人の澤山唱へ奉るは慈救の呪ごと

なうまくさんまんだ。ばざらだん。せんだまかるしやだ。うんたら
 たかまん。

尙ほ短き小呪は

なうまくさんまんだ。ばざらだんかん。

さて以上は此尊の御經と御眞言を出しましたこととありますが其
 中諸佛菩薩の御眞言には畢竟種々子とて一番大切の一字がある是は
 廣くは陀羅尼々々々々を縮めたのが御眞言御眞言を縮めて見れば種子

の一字に歸することゆへ陀羅尼なり眞言なり唱ふるの暇なき時は種
 子の一字を誦すれば宜し此一字の功德は取も直さず陀羅尼眞言を誦
 するに違はぬ功德あることとありますソシテ今此尊の種子は如何と
 云ふにカンと云ふ一字にて此カン字念を入るればカンマンの一字で
 あります然るに此カンマンの字は本とアカマ、マの四字合成の字に
 てア字は本不生の義カ字は菩提心爲因の義マ、字は大悲爲根の義マ
 字は方便爲究竟の義にて此四字はア字本不生際の上の三句五轉を建
 立したる字にして要するに十方一切地前地上の諸賢聖ア字本不生の
 上の三句五轉を経て佛果を成するは此尊の功德にして種子亦此義を
 以て成る處のものにて實に最極微妙の種子なれば苟も心あらんもの
 は須らく此種子を唱へ信心に捧けて此尊に歸命して宜しひことであ
 ります

第三誓願と功德

以上は眞言に付て御話致しましたが是より此尊の御誓願と功德靈驗のありしことを御話致します

さて御誓願と云ふは凡そ諸佛菩薩にはそれ／＼普門大日如來の萬徳の中を一徳々々分けて出して衆生攝化の身となり給ふ是を一門の身と云ふことなるが此一門の佛菩薩には其御一尊御一尊に付て別々の御誓ひと云ふものがあることあります然るに今此不動尊は如何なることを諸佛菩薩に抽て、特別の御誓願として居給ふやと云ふことを御話したいと思ひます

ソコデ此尊の此誓願は前段の名義體相の御話の處や御經等の上にて大抵は出て居ることなれば讀者は茲まで讀み來れば最早大部心の内に御承知なされしことでありまじやふなれども今別科として御話する項目を掲げた也へ少くなりとも御話して功德と靈驗に移ること／＼しよ、處で此尊の御誓願と云ふは大

慈大悲の慈悲忍辱の心を内に包て外に勇猛忿怒の形を現し殊に寶劍羅索等を以て悪しきもの邪まものを挫き降伏せしめて本心の菩提心に歸せしめよふことなし給ふが此尊の誓願にして特に此勇猛忿怒の相を装ひ給ふことであります然れば其功德も速に大なること御經には左の如く説ひてあります「纏かに是の眞言を誦すれば大智火を出して一切の魔軍を焚燒す三千大千世界大忿怒王の威光に焚燒せられて大火聚と成る唯十地の菩薩等と一切の菩薩をを除て諸の冥聚を燒く云云」とあり又偈に「若し是の眞言を持すれば無傾動を成就して諸の往昔の罪を燒き大魔王を降伏せん所求の一切の事持するに隨て成就を得ん十二大天等常に來て加護せよ」とあり又「便者矜羯羅及ひ制吒迦俱利迦羅王藥師拒便是の如き大眷屬或は陰れ或は顯れ來て修行者に奉仕すること世尊を敬ふが如し」とあり又「眞言を修する

行人は是の眞言を持誦すべし身より光明を放て諸の魔王を降伏し所求の一切の奉持に隨て成就を得是の故に護身と名く能く恐怖なきことを得亦眞言明あり加護住處と名く諸の恐怖を遠離して常に勝安穩を得」と又流通分には左の如く説てあります未來世に諸の行人ありて宿福に由るが故に是の如き明王の名號を聞ことを得或は復た是の聖無動尊大威怒王陀羅尼經を受持せん者は當に知るへし是の人は横死あることなし亦恐怖あることなし諸天の護持を蒙て諸の障礙なし何に況や上の如く念誦を爲さんものをや其福無量なり」

如上此尊の御功德の事經文の上では先づ斯様であります右は大抵讀者諸君にても斯く假名交りに譯したれば其意味御分りて此尊の御功德の廣大であること云々も御解りでありますよふ然れども念の爲め茲に摘んで一口に尙ほ御話を致しまするに經文は斯く種々に功德

を説てありますすが要する處此尊を信し此尊の陀羅尼なり眞言なりを誦する人は諸の貪瞋邪見の煩惱を摧破し諸の惡魔を退治し諸の災離を免れ求むる所の願望は何なりとも成就させてやること云ふ廣大なる慈悲の御功德であります尙諸君は上の御經の段に經文を譯し出してあれば能く御拜讀なさるゝが宜し御拜讀なさるれば自ら能く解るよふになります さて此尊の功德のことは右の通りでありますが是は只經文の上にて御話した計でありますれば是より親しく此尊を信し御利益を受けた人を少く計り掲げて益々諸君に信仰を御勧め申さんと思ひます然るに此尊の御利益靈驗は古來數多く礮石集には高野山南院の不動尊又智光院の不動の靈驗記あり本朝諸佛靈應記には高野山萬茶羅院の不動尊信濃國高遠の淨土寺の不動尊の靈驗録あり其他の諸書に此尊の靈驗功德は多々あるなれども今は近く河内國瀧

谷山不動明王靈驗記の中に載ある明治年間になりて御利益を蒙りし人のことを掲げて御覽に入れまじやう

河内の國瀧谷山と云ふ處あり其村の村長を奥城良造と云へるが父は徳治郎と云ふ此人常に同山明王寺の不動明王を信仰し是まで御利益に預りしこともあればさて殊に信心を以て供養し又寺の世話をも爲せしに明治二十一年九月一日のこのこと俄に兩方の眼痛み出し暫くの間は物の色目も分からぬよふなり心も鬱々し食事とても進まざれば妻や子は醫者や藥と種々狼狽廻るに徳治郎の云へる様亦此眼病は醫者も藥も決して入らぬこと我は是まで長く不動尊を信心供養し來りしに此頃より事に紛れて誓ひしことに背きたれば佛罰にても蒙りしに相違なし我久しく不動明王を信じて其利劍の下に生命をも捧げ奉りしものなれば今は我誓旨に背きし罪業を懺悔し何ぞか御利益を蒙る

より外なしと直ちに明王寺へ參詣し寶前に跪き誓て云へるよふ我れ眼病平癒の御利益を蒙らざる内は假令死しても家へは歸らぬ也へ又何ふて平癒の御利益を蒙むること出來ぬ身なれば寧ろ罪業消滅の爲め我生命をば召し給へと一心に祈願し三日の間飲まず食はず鐵石の信心に此尊の御眞言を誦し居りしに三日の曉に至て夢とも現ともなく不動明王の現れ汝ち宿業に依り兼て信心ある身にも斯る病苦を受けしが兼ての信心ある上に今の至心懺悔の功德に依て更に眼光を與へ遣すれば努めく信心怠るなよと告げ給ふかと思ふ間に寶劍を以て眼の中を衝き給ふに驚きながらあゝ難有や勿體なやと御袖に縋らんご頭を擡けたれば御姿は早や消へて失せ給ひて南柯の一夢と夢は覺めたり起き上り見れば眼中より血膿流れ出であるに由て之を拭ひ去れば不思議や寶前の燈明赫灼として眼光鮮かなるご歡喜踴躍し

我々凡夫が無明の煩惱消へ果て、極樂淨土に往生せんも斯くばかり
 ならんさて悦び勇みて家に歸りしは參籠してより僅に三日目の午前
 なりき其後は尙も一層信心の度を高め日々の供養怠らぬばかりか寺
 門の世話にも愈々丹精を抽て、ありしが明治二十一年一月六日業壽
 盡て心裕かに命終し其家督者良造も亦父の志を継ぎ信心怠りなく信
 徒總代として寺門の世話にも淺らかぬ盡力しつゝありと云ふことで
 あります
 尙此尊の靈驗功德の御話をせば枚擧に違あらざるこ
 とでありますもへ是等で止め置きますが諸君よ實に不動尊の靈驗の
 新なること一を聞て十を知れと是にて御承知あり愈よ進て信仰せら
 れんことを御勧め申します
 尙此尊のことも委敷御話せんこと
 ば固より一紙寸毫の能ふ所でありませぬ也へ先は是にて止め置ま
 す

明治四十年九月廿九日 印刷
 同 年十月五日 發行

攝津國武庫郡真元村字小林 平林寺住職 著述者 廣 安 恭 壽
 京都市寺町通五條上ル西橋詰町廿五番戸 發行者 藤 井 佐 兵 衛
 京都市醒ヶ井通魚欄上ル佐女牛井町卅二番戸 印刷者 小 林 庄 兵 衛

佛教書肆 發行所 山城屋 藤井文政堂
 御經類一切 振替口座四五九五番

京都市寺町通五條上ル

十三佛出衆

釋迦如來

藤井文政堂發兌

十三佛由來目次

第一 不動明王
第二 釋迦如來
第三 女殊菩薩
第四 普賢菩薩
第五 地藏菩薩
第六 彌勒菩薩

第七 藥師如來
第八 觀自在菩薩
第九 勢至菩薩
第十 彌陀如來
第十一 阿彌如來
第十二 大日如來
第十三 虛空藏菩薩

十三佛由來第二

僧正 廣安 恭壽 講述

釋迦如來

さて前篇に於て十三佛總體に付ての由來のことは述へ置き第一不動
 明王の由來を御話致しましたこともへ今は別に何も述べず直に第二
 の釋迦如來の御話に移ります。が讀者諸君に於ても十三佛總體のこと
 抔知らんと御思召の御方もあることなれば前篇不動尊の卷を御覽に
 なれば解ることであり。ます。ソコで今は是より釋迦如來の事に移りま
 しょ。ふ。此釋迦如來の御話に付ても前篇不動尊の分と同様御話の便宜
 に依り先つ三科として置ます。

明治 10 3
 内空

第一本尊の名義と體相

第二御經の眞言

第三誓願と功德

先づ初に釋迦如來の名義を御話致しますれば釋迦とは御釋迦様の姓であります如來と云ふは梵語で多陀阿伽陀と云ふを漢語に譯した詞にて解釋せば種々の義もありますが今は如實の道に乗じて來ると云ふ意にて佛の別名と心得て宜しくあります處で釋迦と云は釋迦様の御姓で其姓を取て今日まで直ぐ彼尊の御名として呼でをりますか此釋迦と云に付て實は御釋迦様御誕生の頃迄には印度には五等の種族が分て五種の族姓がありました其五種の中の一族種でありましたが釋迦様が出世なされてから一度釋迦の弟子となるものは此五等の族姓を云はず平等一味とて我も人も一つの種族のものご上下尊卑の隔を滅し釋迦の一種族として仕舞はれたことであります尤も釋尊の姓

も釋迦譜と云ふものを見るに五種の姓を出してあります一には瞿曇と云ひ二には甘簾と云ひ三には釋迦と云ひ四には舍夷と云ひ五には因種と云ふ此五種あつたなれど釋迦と云ふを専ら御用ひあつたご見へます此釋迦氏の太子が眞實にして虚妄でなき佛法眞味の道を御悟りなされ世の大導師となられ玉ふを以て釋迦世尊と云ひ釋迦如來と云ひ釋迦佛と申し上ぐるごとなりました又此尊の御姿を申すれば此尊は右の手を上へ擧げて手招きし玉ふが如き姿せられしが是は鈎召の印と名け元より此尊は久遠實成とて無量世の昔より已に佛の悟を開き玉ふ御佛にして只衆生濟度の爲に世に出現ましますごごもへ強剛離化の衆生を引き寄せて助けんと大慈大悲の涕を催されて御手招きをして居玉ふごごを顯はされしものであります又左の手を膝の

上に置き手を仰げて大指を屈め掌の中を押へて居玉ふは已に御招きに預り來り集りし衆生をば引き留め散り亂せぬと云ふ御内證をば表し玉ふの意であります尤も釋迦如來様のことは釋迦譜を始とし釋迦一代記等種々の書物もあること也へ讀者諸君御覽になるも至極便利のことであります

さて此尊の御體相のことやら御姿のことは是位のことと置き是より陀羅尼眞言の御話を致します

第二御經眞言

さて此尊の御經と御眞言とを御話することとありますが此尊の御經と云へば此尊一代五十餘年の間說法し玉ふ御經は其御説きなされた御經説時を云も華嚴、阿含、方等、般若、法華、涅槃とあり其經卷

の多きことは今日の大藏經にても五千餘卷の多きと云ふ然れども此尊が四十餘年の間種々色々の機根に隨て攝化利生し給はれし御經は斯くも澤山あることなれど凡そ諸佛菩薩を本尊として其御一尊御一尊の本誓内證をばそれくの御内證に入り御説きなされたるものに於て全く自分の内心を其儘御説なされたのは法華、涅槃の二經と弟子方の訓誡に遺されしは遺教經でありますソユテ法華と云ふた處で承くてもなりませぬ又涅槃經といたした處が一寸のことでありませぬ也へ茲に遺教經を譯出して此尊を供養するの御經と致しましやふ

佛遺教經

釋迦牟尼佛初に法輪を轉して阿若憍陳如を度し最後に法を説て須跋陀羅を度して度すべき所の者は皆な度し已て娑羅雙樹の間に於て將

に涅槃に入らんこそ是の時中夜寂然として憐なし諸の弟子の爲に略して法要を説給ふ

汝等比丘我滅後に於て當に波羅提木叉を尊重し珍敬すること闇の明に遇ひ貧人の寶を得たるが如くすべし當に知るべし此は則ち是れ汝等が大師なり若し世に住すとも此に異なることなし淨戒を持たん者は販賣し貿易し田宅を安置し人民奴婢畜生を畜養することを得され一切の種植及び諸の財寶皆當に遠離して火抗を避くるか如くすべし草木を斬伐し墾土堀地して湯藥を和合し吉凶を占相し星宿を即觀することを得され推歩盈虛歷數算計皆應せざる所なり節身時食し清淨に自活せよ世事に參與通致使命することを得され呪術仙藥結好貴人親厚媠慢皆作すべからず當に自ら端心正念にして度せんことを求む

べし瑕疵異を異し衆を惑すことを得され世の供養に於て知量知足せよ趣得の供事畜積すべからず此れ則ち略して持戒の相を説く戒は是れ正順解脱の本なり故に波羅提木叉と名く此戒に依て諸の禪定及び滅苦の智慧を生ずることを得是の故に比丘當に淨戒を持て毀缺せしむること勿れ若し人淨戒を持てば是れ則ち能く善法あり若し淨戒なければ諸善功德皆生ずることを得ず是を以て當に知るべし戒を第一安穩功德の所住の處と爲す

汝等比丘已に能く戒に住す當に五根を制すべし放逸して五慾に入れしむることなかれ譬へば牧牛の人の杖を執て之を視せしめて縱逸にして人の苗稼を犯せしめ若し五根を縦にすれば唯々五慾の將に崔畔無して制すべからざるが如きのみならず亦惡馬の輿を以て制せざれ

ば將に人を率ひて抗陷に墜すが如し賊害を被むるが如きは苦一世に
 止る五根の賊は禍殃累世に及ぶ害を爲すこと甚だ重し慎まずんばあ
 るべからず是の故に智者制して而かも隨はざれば之を持すること賊
 の如くして縱逸せしめず假令之を縱にせしむとも皆亦久しからずし
 て其磨滅を見ん此五根は心を其主と爲す是の故に汝等當に好く心を
 制すべし心の畏るべきこと毒蛇惡獸怨賊よりも甚し大火の越逸する
 未だ喻と爲すに足らず譬へば人あつて手に密器を執て動轉輕躁にし
 て但た密をのみ觀て深き抗を見ざるが如し譬へば狂象の鈎なく猿猴
 の樹を得たるか如し騰躍踴躍して禁制すべきこと難し當に急に之を
 控して放逸せしむることなけれ此心を修すれば人の善事を喪ふ之を
 一所に制すれば事として辨せざることなし是の故に比丘當に勤精進

して汝が心を折伏すべし
 汝等比丘諸の飯食を受く當に藥を服するが如くにすべし好に於ても
 惡しきに於ても増減を生することなけれ趨に身を支ふることを得て
 以て飢渴を除け蜂の華を探るに但た其味を取て色香を損せざるが如
 く比丘も亦爾なり人の供養を受けて趨に自ら惱を除け多求して其善
 心を壞ること得ることなけれ譬へば智者の牛の刀の堪ゆる所少を籌
 量して過分の以て其力を竭さしめざるが如く
 汝等比丘晝は則ち勤心に善法を修習して時を失せしむることなけれ
 初夜後夜亦廢することあることなけれ中夜に經を誦して以て自ら消
 息せよ睡眠の因縁を以て一生空しく過して得る處あらしむることな
 かれ當に無常の火の諸の世間を燒くことを念して早く自度を求むべ

し睡眠することなかれ諸煩惱の賊常に伺ふて人を殺す怨家よりも甚し安んぞ睡眠して自ら警寤せざる煩惱の毒蛇睡て汝が心に在り譬へば黒蛇の汝が室に在て睡んが如し當に持戒の鈎を以て早く之を除くべし睡眠既に出て、乃ち安く眠るべし出でざるに而も眠るは是れ無慚の人なり慙耻の服は諸の非法を制す是の故に比丘常に當に慙耻して暫くも替たるを得ることなかれ若し慙耻を離るれば則ち諸の功徳を失す有愧の人は則ち善法あり若し無愧の者は諸の禽獸と相異なることなし

汝等比丘若し人有て來て節々に文を解くことも當に自分心を攝して眞恨せしむることなし亦當に口を護て惡言を出すことなし若し心を縦にすれば心自ら道を妨く功徳の利を失す恐の徳たること持戒苦行も

及はすこと能はざる所能く忍を行するものを乃ち名けて有力の大人と爲すべし若し其れ惡罵の毒を歡喜忍受して甘露を飲むが如くすること能はざる者をば入道智慧の人と名けず所以いかなることなれば眞恚の害は則ち諸の善法を破し好名聞を壞す今世後世人見んことを喜ばず當に知るべし眞心は猛火よりも甚し常に當に防護して入ることを得せしむることなかれ功徳を劫かす賊眞恚に過たるはなし白衣受欲非行道の人法として自ら制することなき眞猶恕すべし出家行道無欲の人而かも眞恚を懷く甚だ不可なり譬へば清涼の雲の中に霹靂して火を起す所應に非ざるが如く

汝等比丘當に自ら頭を摩へし己に飾好を捨て、瓔色の衣を着し應器を執持して乞を以て自活す自ら見るに是の如し若し憍慢を起さば當

に疾く之を滅すべし憍慢を増長する尙ほ世俗白衣の宜しき所に非ず
何に況や出家入道の人解脱の爲の故に自ら其心を降して乞を行せん
をや

汝等比丘諳曲の心は道と相違す是の故に宜しく其心を質直にすべし
當に知るべし諳曲は但た欺誑を爲す入道の人には則ち是の處なし是の
故に汝等宜く端心にして質直を以て本と爲すべし

汝等比丘當に知るべし多欲の人は多く利を求むるが故に苦惱亦多し
少欲の人は求なく欲なければ則ち此患なし直爾に少欲なる尙ほ修習
すべし何に況や少欲は能く生ず諸の功德を生ず少欲の人は則ち諳曲
して以て人の意を求むることなし亦復諸根の爲に牽かれむ少欲を行
する者は心は則ち坦然として憂へ畏るゝ所なし事に觸れて餘あり常

に足らざるることなし少欲ある者は則ち涅槃なり是を少欲と名く

汝等比丘若し諸の苦惱を脱れん少欲は、當に知足を觀すべし知定の
法は則ち是れ富樂安穩の處なり知足の人は地の上に臥す雖も猶
安樂とす知足の者は天堂に處す雖も亦意に稱はむ知足の者
は富めりと雖も而かも貧し知足の人は貧しと雖も而かも富めり
知足の者は常に五欲の率かるゝ知足の者の爲めに憐愍せらる是を
知足と名く

汝等比丘若し寂靜無爲安樂を求めば當に憍開を離るべし獨處閑居靜
處の人は帝釋諸天共に敬重する所なり是の故に當に已衆他衆を捨つ
べし空閑獨處して苦本を滅せんことを思へ若し衆生を樂ふ者は則ち
衆惱を受く譬へば大樹の衆鳥之を集れば則ち枯折の患あるか如し世

間の縛着は衆苦を没す譬へば老象の泥に溺れて自ら出づること能はざるが如し是を遠離と爲す

汝等比丘若し勤精進すれば則ち事として難きものなし是の故に汝等當に勤精進すべし譬へば少水の常に流れて則ち能く石を穿つか如し若し行者の心数々懈廢すれば譬へば鑽火の未だ熱からざるが如し而かも息めば火を得んと欲すと雖も火得へきこと難きが如し是を精進と爲す

汝等比丘善知識を求め善護助を求むること不妄念あるものは諸の煩惱の賊即ち入ること能はず是の故に汝等常に當に念を措して心に在くべし若し失念のものは即ち諸の功徳を失す若し念力堅強なれば五欲の賊の中に入ること雖も爲に害せられむ譬へば鎧を着て陣に入る

に畏るゝ處なきが如し是を不妄念と名く

汝等比丘若し攝心の者は心則ち定に在り心定にあるが故に能く世間生滅の法相を知る是の故に汝等常に當に精勤して諸定を修習すべし若し字を得る者は心則ち散せず譬へば積水の家の善く堤塘を治するが如く行者も亦爾なり智慧の水の爲の故に禪定を修して漏失せざらしむ是を名けて定とす

汝等比丘若し智慧あれば則ち貪著なし常に自ら省察して失することあらしめざれ是れ則ち我法の中に於て能く解脫を得べし若し然らずんば既に道人に非ず又白衣に非ず名くる所なし定の智慧は則ち是れ老病死海を度る堅牢の船なり亦是無明黑暗の大明燈なり一切の病者の良藥なり煩惱の樹を伐る利斧なり是の故に汝等當に聞思修慧を以

て而かも自ら増益すべし若し人智慧の照あれば天眼なしと雖も而かも是れ明見の人なり是を智慧と名く
 汝等比丘若し種々の戲論は其心は亂る復た出家すと雖も猶未だ脱を得む是の故に當に急に亂心戲論を捨離すべし汝ち若し寂滅の樂を得んと欲は、唯當に速に戲論の患を滅すべし是を不戲論と名く
 汝等比丘諸の功德に於て常に當に一心に諸の放逸を捨て、怨賊を離るゝが如くすべし大悲世尊利益せんご欲する處皆已に究竟す汝等但た當に勤て之を行ふべし若し山間若しは空澤の中に於て若し樹下閑處靜室に在て所受の法を念して妄失せしむることなかれ常に當に自ら勉め精進して之を修すべし爲すことなくして空しく死せば後に悔ゆることを致さん我は良醫の如く病を知て藥を説く服するご服せざ

るごは醫の咎に非ず又善く導もの、人に善き道すじが如し之を聞て行かざるものは導くもの、過に非ず
 汝等比丘若し吾等の四諦に於て疑ふ所あらば疾く之を問ふべし疑を懷ひて決を求めること得ることなかれ爾の時に世尊是の如く三ひ唱給ふに人間ものなし所以何となれば衆疑なきが故に時に阿菟樓陀衆の心を觀察して佛に白して言はく世尊月は熱からしむべく日は涼しからしむべく佛の説給ふ四諦は異ならしむべからず佛の説給ふ苦諦は實に苦なく樂ならしむべからず集は眞に是れ因なり異の因なし若し滅すれば即ち是れ因滅す因滅するが故に果滅す滅苦の法は實に是れ眞の道なり更に餘の道なし世尊此の諸の比丘四諦の中に於て決定して疑なし此衆の中に於て若し所依未だ辨ぜざるある者は佛の滅

度を見て當に悲喜あるべし若し初て法に入るこゝあるものは佛の所
 説の法を聞いて皆即ち皆得度す譬へば夜電光を見て即ち道を見るこゝ
 を得るが如し若し所依已辨して苦海を度すこゝあるものは但た此
 念を爲す世尊の滅度一分何ぞ疾き哉と阿耨樓陀此語を説くに衆の中
 に皆悉く四聖諦の義を了達すと雖も世尊此諸の大衆をして皆堅固
 なるこゝを得しめんと欲して大悲心を以て復た衆の爲に説給ふ汝等
 比丘悲惱を懷くこゝなかれ若し我れ世に住するこゝ一切すこも會ふ
 者は亦當に滅す會て而かも離れざるこゝ終に得へからず
 自利々人法皆具足す若し我れ久しく住すこも更に益する處なからん
 度すべき者は若は天上人間皆悉く已に度す其未だ度せざるものは皆
 立已に得度の因縁を作す今より後ち我が諸の弟子展轉して之を行せ

ば則ち是れ如來の法身常に在しまして而かも復せざるなり是の故に
 當に知るべし世は皆無常なり會者は必ず離る愛惱を懷くこゝなかれ
 世相是の如し當に勤精進して早く解脱を求め智慧の明を以て諸の痴
 闇を滅すべし世は實に危脆なり空強のものなし亦今滅を得たり惡
 病を除が如し此は是れ應に捨つべし罪惡の物假に名て身と爲す老病
 生死の大海に没在せり何ぞ智者あつて之を除滅するこゝを得ん怨賊
 を殺すが如くして歡喜せざらん汝等比丘常に當に一心に出道を勤求
 す一切世間の動不動の法は皆是れ敗壞不安の相なり汝等且く止みぬ
 復た語するこゝを得るこゝなかれ時將に過んどす我れ滅度せんこ欲
 ふ是れ我が最後に教誨する處なり
 次に眞言を話せば此尊の眞言は先つ大呪を出せば

なうまく。さんまんだばだなんばく。さらばきれいにりうたなら
 さうばたらま。ばした。はらはた。きやくなう。さんまくそわ
 かに小呪を出さば

なうまくさんまんだばだなんばく
 此尊の眞言は斯の通であります但其眞言の中にも尤も肝要の種子
 と云はサ字であります此サ字は是はアア、マンアクの四字を合成し
 て一體となしたる字にて先つア字は菩提心の義にて無上菩提心に趣
 向するを先とする功德ある字でありますア、字は行の義修行速疾の
 方便にて福德智慧の資糧を集むるに由て無上菩提を證する功德ある
 と云ふ字でありますアン字は等覺の義無邊の皆解脱三昧地陀羅尼門

を證するに由て四種の魔羅を摧破して十方如來の三界法王の灌頂を
 受て正法輪を轉する功德あると云ふ字でありますアラ字は涅槃の義
 煩惱所知の二障を斷するに由て自性清淨涅槃有餘依涅槃無餘依涅槃
 無住涅槃の圓寂を證する功德あると云ふ字でありますされば此尊の
 種子は斯く深重の功德ある字を四字合したる字にして毘盧遮那佛自
 覺聖智四種智解脱の種子にて大日如來と無二無別の功德ある字であ
 りますさればこそ此釋迦如來は大日如來の分身にして法報應三身の
 中の應身佛とこそ云へることであります要するに此尊は大日如來の
 說法談義の徳を司つて衆生攝化に此娑婆世界へ生れ來り給ふ佛であ
 ります然るに私等何の因縁か生れ難き人身を受け又値ひ難き佛法に
 逢ひ此尊の遺教を蒙り轉迷開悟の道を明らかに生死海中を出離し所縁

の淨土に參ることが出来る身となりしは幸の中の幸にて是も皆此尊の御蔭なりと歡ひ勇て信仰せらるべきことであります

第三誓願功德

以上は御經と眞言とを御話したことでありますが是より御誓願のこを御話致しますに此尊の誓願は上求菩薩下化衆生と自分を利益し他人を化度するの二利の誓願なれども此尊は自利の分は已に久遠實成の佛身なるが故に最早自分の爲として求むる所は更にありません唯下化衆生との一方にて現在世未來世の衆生を濟度し遣さんとし玉ふ御誓願のみである

次に功德のこを御話せば已に御誓願が斯の通り上求菩提のこは且く置き下も衆生を度すると云ふに付ては此尊御在世は言までもな

く御入滅以後今や二千八百又餘年の今日に至り此尊の御威徳御感化の天下に及び居ることは實に海の内外を問はず國の東西を擇ばず此尊の教を蒙らざるものなく此尊の教化に預らざるものこてもありません實にも難有御功德にてこれあることであります要するに諸佛菩薩は數多く其御誓願の功德も何れ劣らぬことなれども是等の尊は多くは何れも皆な他方世界の教主等にて全く此土出現の上へ我等と共に托胎出胎等娑婆世界の風儀を守て此土に出でさせられて親しく攝化下されしは獨り釋迦如來に限ことであります然るに其功德も法の上のみにて話したばかりでは有難味の事柄もいかゝあらんことゆへ是より其靈驗の親しくこれありしこを左に演述して讀者諸君の御聞に入れることゝ致します

さて靈驗も御在世なり御入滅後にありしことを述べれば種々色々澤山なることでありますれど今は三寶感應錄に載する處の唐土凝觀寺の僧法慶法師が釋迦尊の御像を造りし功德にて閻魔王宮より還へされし事を讀者の御覽に入るべし唐の開皇三年に凝觀寺の僧法慶なるもの夾紵釋迦の立像一軀を造る其長け一丈六寸なるに其造工未だ終らざるに法慶遂に死す其が又寶昌寺の僧大智と云へるもの死して後ち三日を経て立便ち蘇活して曰く閻羅王の前に於て僧法慶が愛へる色あるを見る暫くの間にも又像の來るあり閻魔王俄かに階を下り此像を合掌禮拜す像は王に謂て曰く法慶我を造りて未だ功を終へず如何ぞ死せしむ王自ら顧みて一人に問て曰く法慶死せしむるや否や答て曰く命未だ終るべからずされども食盡て死す王の曰く荷葉を給ふべし

今其福業を給ふと而して大智蘇生し又法慶も蘇生し共に其見る處説く處同じことなりし法慶蘇生の後ち荷葉を食して付囑となし餘食を食せず其後佛像成功の儀相圓滿にして屢光明を放てり云ふ○又唐の隴西の李太安が妻太安が爲め釋迦の尊像を造て死を救ふ感應の事を述べれば是又三寶感應錄に出つ唐の隴太安夢覺の遂に蘇て瘡も亦痛まず能く起て坐食し十數日にして京の宅の子弟迎へて家に至る家人故舊來て太安かを視る太安爲に傷を被り佛像を見奉りし本を説く然るに一婢ありて此大安が話を聞き不思議に思ひ大安が家に於ける妻の行を語り曰く安か妻婢をして像工に詣して爲に佛像を造らしむ成て綵を以て衣に畫く一點の朱像の背の上を汚すことあり當に工をして之を去らしむるに胥んぜず君が所説の如しと大安因て妻及び家人

共に起て像を處に異なることなし是に於て是も全く釋迦世尊尊像
 を造りし感應なり是より益々佛法を信仰せりと云ふ實に佛智の不
 思議貴ぶべきことであります冀くば世の善男善女の諸子よ是等因縁
 のことは世尊滅後より印度支那我國の三國に涉り數限もなきことに
 て今更操返も愚かなること只々我人が今世後世の大導師なる大恩世
 尊の大慈大悲の御恩徳を感謝して益々信仰を勵むべきことであり
 ます

明治四十年九月廿九日 印刷
 同 年十月五日 發行

攝津國武庫郡真元村字小林 平林寺住職

著述者 廣安 恭壽

京都市寺町通五條上ル西橋詰町廿五番戸

發行者 藤井 佐兵衛

京都市醒ヶ井通魚棚上ル佐女牛井町卅二番戸

印刷者 小林 庄兵衛

不許複製

京都市寺町通五條上ル

佛教書肆 發行所 山城屋 藤井文政堂

御經類一切 振替口座四五九五番

十三佛由來

文殊菩薩

藤井文政堂發兌

十三佛由來目次

第一 不動明王
第二 釋迦如來
第三 文殊菩薩
第四 普賢菩薩
第五 地藏菩薩
第六 彌勒菩薩

第七 藥師如來
第八 觀自在菩薩
第九 勢至菩薩
第十 彌陀如來
第十一 阿闍如來
第十二 大日如來
第十三 虛空藏菩薩

十三佛由來第三

僧正 廣安 恭壽

文殊菩薩

さて如止は不動尊と釋迦如來と二尊相濟みましたが是より第二に40 10 3 文殊菩薩の御話を致します處で此分も御話の次第を三段に分けて

第一本尊名義と體相

第二御經と眞言

第三誓願と功德

斯ふでありますか第一に此尊の名義を御話致しまするのに文殊とは梵語の訛言とて言はゞ誤りに引直せば妙音と云ひ亦是妙吉祥とも云ふ然して妙音とは此尊大慈悲の力を以て妙法を演説して一切衆生をして聞かしむと云ふ意であります又妙吉祥とは此尊の智慧の徳は譬



は醍醐の純淨にして一切の妙味を具ふるが如く諸の衆徳を具へ居玉ふこの意であります次に體相のここを御話致しますに此尊は右手に利劍を持ち左の手に花を持ち頂上には寶冠を戴き玉ふ尊なることは讀者諸君の皆御承知のことてありまじやふ其中利劍は能斷の義を表するものにて物の是非善惡を決斷簡擇する此尊の内證を示せるものであります又左の手の梵篋は是は世間出世間一切の智慧を藏めて時に衆生の願に隨て分ち與へ玉ふ御内證を示せしものであります以上は略して此尊の名義に體相を御話致しましたが是より御經と眞言とを御話致します

第二御經と眞言

さて此尊の御經のここを御話致しますれば此尊には澤山の御經があ

りますが大聖文殊師利菩薩功德莊嚴經と云ふもの上中下三卷のものあり不空三藏の譯なり又曼珠室利瑜伽と云ふ不空三藏の譯なり又五字陀羅尼頌と云ふ不空の譯又文殊師利供養法と云ふ不空の譯又文殊師利菩薩法と云ふ不空の譯又文殊五字眞言勝相と云ふ不空の譯又文殊一字陀羅尼法と云ふ唐天竺三藏寶思惟の譯又文殊師利所說摩訶般若波羅密經と云ふあり梁扶南三藏曼陀羅偈の譯なり又金剛頂經瑜伽文殊師利菩薩法一品とあり不空の譯今左に之を和譯して出すべし

金剛頂經瑜伽文殊師利菩薩一品

唐特選試鴻臚卿三藏沙門大廣智不空詔を奉て譯す

爾の時文殊師利菩薩毘盧遮那大會の中に在り座より起て佛足を頂禮

して佛に曰して言く世尊我れ今本五字陀羅尼を説く若し善男子善女人あつて纏に一返誦する者は一切如來說く所の法義修多羅藏讀誦し受持する等彼功德毘盧遮那文殊師利に告げて言はく意に隨て之を説く爾の時文殊師利即ち明を説て曰く
 あらはしやのふ

纏に此陀羅尼を説く一切如來所説の法攝入五字陀羅尼の中に能令衆生を利益す般若波羅密多成就す今當に曼荼羅法を説くべし或は十四日十五日極清淨の處を選擇して曼荼羅を作り瞿摩夷を以て地に塗り復た白壇香の泥を以て之に塗り隨意大小曼荼羅の中に於て文殊師利童子の形狀を畫く身は鬱金色の如く種々瓔珞其身を莊嚴し右手に金剛劍を把り左手に梵篋を把り月輪の中に於て月輪四面に於て周旋し

て五字陀羅尼を書く阿闍梨此壇に對して金剛劍印を結び念誦す時に文殊師利此を加持すれば阿闍梨即ち無身辨才を得仍日現身の爲に一々に此陀羅尼甚深の義理を解釋す時に阿闍梨即ち當に禮拜して迷場外に出べし弟子の爲に菩薩戒を授く即ち緋帛を以て眼を覆ひ壇場の門に引入し次で立つ時阿闍梨弟子に告て言く汝ち今一切如來般若波羅密を獲今より後ち人に向て此明を説くべからず汝が三昧耶法を破らしむべからず此陀羅尼極めで應に秘密にすべしアラハとは是れ一切の願を滿する義何を以ての故にア字は菩提を樂欲する義ヲ字は染着して衆生を捨てざるの義ハ字は第一義諦の義シヤ字は妙觀の義ナ
 ヲ字は無自性の義はり菩提を樂欲して衆生を捨てず第一義諦の中の行々修習の諸法は無自性なり若し是の如く一切の願を滿し此諸願の



中に如來の位及び執金剛を證して求めざるに當に得るあり我今又説
 く契經印曼荼羅壇中金剛劔を畫く四面各本方に於て八供養契及び四
 攝契を畫く此壇に於て念誦久しからず即ち當に成就すべし我今又説
 く三昧耶曼荼羅壇の中は五字及び八供養四攝種子の字を畫く此壇に
 對し念誦して是の言を作すア字門は諸法本不生日々念誦せば久しか
 らずして一切の罪障消滅し速に成就を得我今又説く羯磨曼荼羅の壇
 の中に般若羅波密經卷を安し日々に讀誦念誦し種々の供養を以て之
 を供養せば久しからずして即ち當に成就すべし我今當に畫像の法を
 説くべし或は白氍毹素等の中に文殊師利菩薩を畫く月輪の中に坐す
 輪の内周旋して五字を畫く四面に入供養及び四攝を畫く大壇法の如
 く此像前に對し如法に念誦して此言を作す諸法は自性念誦の數を成

就して五千萬遍に滿れば即ち無盡の辨才を獲文殊師利菩薩等の如く
 異なることなし虚空に飛騰し求むる所の世間の出世間の事悉く成就
 を得又念誦數一俱低に滿れば諸の苦惱を離れ二俱低を滿れば五無間
 等に徧する一切の罪障永く無餘の三俱低を盡して徧へに一切諸の三
 昧門四俱低を證悟す徧に大聞持五俱低を獲徧へに阿耨多羅三藐三菩
 提を成す又法を金剛塔に於て四面周旋右轉に五字陀羅尼を盡く塔を
 遶くる行道念誦斷絶せしむること勿れ五洛叉に滿了し爾の時に如來
 及び文殊師利執金剛等虚空の中に於て其身を現す仍て説法を爲す
 金剛頂經瑜伽文殊師利菩薩法一品
 次に眞言を申せば此文殊菩薩眞言には一字文殊の呪五字文殊の呪六
 字文殊の呪八字文殊の呪等と分れり然れども今は五字文殊の呪を出

します

をんあらはしやなう

此尊の眞言は斯の如くであります御經の中に眞言の字義釋の出たるが如くアは菩提を樂起する義ヲは衆生に染着して捨離せざる義ハは第一義諦の義シヤに行の義ナウに無自性の義要するに此尊の内證は深般若の妙惠を以て入迷の戲論を斷し自性清淨ならしめ玉ふを以て本誓とし玉ふが故に無自性の字義を以て種子とし玉ふものであります

第三誓願と功德

以上は御經と眞言とを御話したることでもありますが是より御誓願のここを御話致します此尊の御誓願は此尊は三世諸佛の覺母一切衆生

に般若の智慧を與へて衆生の迷を拂ひ本性清淨の心品に返らしめ玉ふを誓願とし玉ふものであります今讀者の爲に三寶感應錄にある此尊の利益因縁を御話すること、致します昔貧女あり齋會施食あるを聞き晨より寺に到る二人の子を携へ抱きしに一疋の犬あり之を隨ふ身の餘の資なし髪を剪て施せり又衆食に違あらざるに主僧に白して曰く先づ食せんと思に遠て、他の行に就く僧亦許可す僅に命して饌三倍を與へて之を貽る意ふに今貧女二子俱に足なん女曰く犬にも亦當に與ふべし僧勉強して復た與ふ女の曰く我腹に子あり更に須く食を分つべし僧乃ち憤然として語て曰く汝僧の食を求めて厭くことなし若し是れ腹に在て未だ生せずんは如何が食すべけん之を叱して去らしむ貧女呵られて即時に地を離れ倏然として身を起す即

ち文殊の像なり犬は師子なり兒は即ち善才及び千國王なり五色の雲
 氣靄然として空に遍す因て偈を留て曰く苦爪根を連て若し甜爪帶を
 徹し甜し是れ我三界を越ゆ却て阿師に嫌はれ菩薩偈を説き已て遂に
 隠れて見へず會に在る緇素驚嘆せざるものなし主僧眞聖を知らざる
 を恨み刀を以て目を割んと思ふ衆人懇に勉めて方に止む爾の時貴賤
 等貧福を視ること二なり遂に貧女の施す所の髮を以て菩薩の雲に乗
 して起つ處に於て塔を建て供養せり云ふことであります
 又阿育王文殊の像を造りて感應ありしことを述べ昔し阿育王鬼立
 の制獄を學て伏魔尤も甚し更に地獄を作て凶人を獄卒と爲す文殊現
 して鑊の中に處し火熾に水清して青蓮花を生す心感悟して即日獄
 を毀る八萬四千夫人同しく火坑に入る八萬四千の塔に形像を建立す

ること其數も亦た四萬八千なり此土東晋の盧山の文殊の金像此其一
 なりと云ふことあります
 又照果寺の解脱禪師が文殊に値ふ感應の事を述べ支那五臺縣の照
 果寺の釋の解脱常に法を誦し并に佛光等の觀を作す文殊を追尋する
 に東堂の左に於て再び逢ひ遇ふ初め禮せり禮畢て其形を失ふ後には
 親り訓誨を承る脱文殊に請問して曰く大士如何ぞ此土の愚痴無智の
 闕信離化の衆生を利益する文殊答て曰く我一日に三時破魔の三昧に
 入て此土の衆生の魔業を破り智母三昧に入て愚痴の闇を破り地獄の
 中に往て佛身を現し光を放て説法し餓鬼城に往ては能く飯食を施す
 餘人の所施は口に入れども化して火炭となる唯我所施のみ能く身心
 を益して天に生して解脱せしむ畜生道に入ては能く愚痴を除き智解

を開悟して皆な菩提心を發さしむ脱又問て曰く何れの衆生か化度する
 ところを得る文殊の曰く我形像を畫き我形像を造り或は手爪を以て
 し或は菴羅草の如く口に自ら發言して南無と稱す此の如くの衆生は
 化度すべきこと易し自餘の衆生は悲心を盡すと雖も自業を以ての
 故に化度すべきこと難し又問ふ脱如何して即ち無生を悟て永く退落
 なからん文殊の曰く汝ち往昔我形像を造ること三寸許なり善根既に
 熟せり今何ぞ親り我を禮すべけん自ら悔責する所必ず悟解せんのみ
 脱敬て聖旨を承く因て自ら内に求めて乃し無生を悟り兼て法喜を増
 して乃し諸佛の現身說法を感ずと云ふ
 又釋智猛文殊を畫て精誠供養感應を得しことを述べれば親の智猛少し
 て甚だ愚痴なり都て分別の心なく其父爲に錢三十文を用て文殊の像

を畫き其子をして像に對せしむ夢に像光を放て兒の頂を照すに光頂
 に入ぬと覺めて後ち自然の辨智あり學法長年の比丘の如し更に經律
 等を質すこと文の如く文義を諳誦すること所として了らさることな
 く出家の後ち才智人に超へたり號して智猛と曰ふ文殊梵僧と化作し
 て此土に來り智猛に謁す
 又智臺縣の元通文殊の形像を造りし感應の事を述べば張元通信心貞
 固にして發願して文殊の像高さ三尺なるを造て室内に安して方に供
 養す夜の三更に至て梵僧兩三手に香呂を執り室内に來至して像を遶
 くること三遍して忽然として見へず彌々信心を發して香花を供養す
 ると其翌日の日暮に像より光を放て五更に至る通夢に見る十方諸佛
 室内に來集して妙花を以て形像を供養して云く是れ我が本師を敬す

るを以ての故に我等供養す諸佛亦妙瓔珞を以て元通に供養して曰く汝ら信心を以て我師の像を造る故に來て供養す通夢中に諸佛に白して言く十方世界に文殊像を造り及ひ能く之を畫する者の諸佛皆な其處に向ひ玉ふや佛の曰く十方世界に若し此事あらば我等皆な之を供養す何を以ての故に我等が發心は皆な是れ文殊教化の力なり若し文殊の歸依するところあらば十方諸佛に歸依するに超過せり即ち偈を説て言く文殊大聖尊は十方諸佛の師なり是偈を説て言さく文殊大聖尊は十方諸佛の師なり歸依供養するものは諸佛を供養するに超へたり是偈を説き已て忽然として現せむ通復た聖衆の來迎を見て云く吾れ金色の世界に生れんと云云通在生の時は隠して語らず遺書を注るして箱に收む壽終の後ち顯はれたり其像照果寺に移せり靈驗顯著

なりご

又寶永年中またほうげいねんちゆうの事なりしが播州ばんしゆうに年齢六十許ねんらいはろくじゆの貧き男あり或時より圖らず左の手ひだりてを痛て自由ならず營へき便もなく身の佗たしきに打そへて歎なげきに歎なげきを重ね種々療治しゆくわいしたれども更に其効きこうなかりけり然るに宿世しゆくせの善緣ぜんねん此日このひにや催ほよほしけん唯何ただなにもなく文殊菩薩もんじゆはつさつの悲願ひくわん最も身みに染しみて難有がたひ思おもひ出いて此寺このてらの本尊ほんぞんに一七日夜籠いちじつやこもり祈いのりければ忽たちよち痛いたみ止やめて本の如ごとくなりけるごなり

又天正年中またてんしやうねんちゆうのごごなりしが紀州きしゆうに新官若狹守にいみやわかたかと云ふ士あり戦功せんこう倫りんを超こへ武勇世ぶゆうよに隠かくれなかりけるが吉川駿河守きつかわするま義耀公よしかつに事つかんことを望のぞみて西國さいごくに下くだれり已すに周防國すほうのくにに至いたり城邊じやうへんに近いかきける處ところに圖はからさるに一人の武者手むしやてに拔ひける太刀たちを持ち急きゆうに走はり來きて若狹わかたかに向むかひ我數年心われすうねんこころに

かけし敵を討ち只今正に落去らんと欲す然るに敵方の大勢後より逐ひ逼り來れり願は君此等の者を防ぎ玉はれ其邊に逃げ落なん云ふ本より若狹は如何なる人とも知らされども流石に武士たる身の斯る時に臨みて頼みつることなれば辭すべき様もなく領掌せる處に暗の如く數十人の者風の如くに群り來れり若狹さりあへず彼等に向ふて防ぎ戦ひける程に忽五六人切り伏たり敵是に恐れて少し退き又矢を射かくること恰も雨降り墜降るに似たり然れども若狹が頭の上には異人あつて光明を放てること日輪の如くして射かくる矢を中に拂ひ落しければ若狹には一筋も當らざりき是に因て敵も力及ばずして此に有様を主君吉川公に告げり吉川も希有のことに思ひ且く戦を止め使者を以て云へらく汝は何なる人にして斯の如くの振舞をなせるや

若狹答て曰く我は是れ紀伊國新宮若狹云ふ者なり吉川公に事んことを望みて此國に下れり然るに今日不慮に一士あつて我を頼て死地を遁れんことを願へり是に依て餘義なくかゝる次第なり云ふ吉川之を聞き即ち近く招き寄て云く先に我が家弓矢を以て汝を射るに頭上に神人あつて其矢を中に拂ひ落せりご何なる神術のありけるにや若狹答て云く我他の方便なし唯年來文殊菩薩に歸命して尊像を畫て甲の中に安せり知らず此尊の守護し玉ふにやご其儘甲を脱ぎ見れば尊像の御身より汗湧が如くに出玉ふ時に吉川公を始め諸侍に至るまで不思議なりける靈驗やご皆な感心せるごなり儲吉川公の云く我は是れ即ち駿河守なり汝予が家を慕て遠く來れること芳志誠に淺からざれども今日我家人を殺すこと鮮ならむ定めて怨念を結ぶ者多

からん書を以て太閤秀吉公の方に頼み遣はすべしと若狹徳情を感喜し即ち命に任せて彼に往き秀吉公に事て後ち忠勤の譽他に勝れたり
こなん

又阿波國勝浦郡日開野村藤樹寺の文殊菩薩は高野大師四十二歳の御
歳厄除の爲とて一刀ごごに三禮を爲し彫み玉へる靈像なり此寺の舊
記に依るに我が祖弘法大師此尊像を勝地に安置せんと思ひ靈地を尋
て所々を經過し玉ふ時に或夜一燈高く輝きて天を貫ける所あり怪し
ながら光を慕ふて行玉ふに長塘一帶の河水清く流れて涕々たるあり
他の燈光は此河水の畔より放てるなり能く見玉ふに傍に大さ三圍に
過ぎ高さ五丈に餘れる藤樹あり枝葉蔓延とつるはひこれり時に忽然
と威靈なる童子出現して大師に告て曰く我は是れ勝占の神なり曾て

此樹を愛するが故に茲に來りて鎮座し夜毎に燈火を龍宮に乞て此の
地に點して歡樂せり今貴僧の護持せる佛は往昔菩薩大願を發し濟度
を無窮に誓ひ玉ふ誠に滿世薄福の衆生に於て別に利益廣大なる如來
なれば應に此地に安置すべし我永く守護せん云ひ畢りてかき消す
様に失せ玉ふ大師は歡喜云はん方なく是ぞ願ふ處の靈場なりと即ち
伽藍を造營して文殊菩薩を奉安せり是に因て寺を藤樹と名けたりと
それより以來本尊の靈驗揭焉なれば求願の輩絡繹たり茲に彼國の城
下樋口氏の家臣に梶浦安左衛門寬量と云ふ士あり享保十年五月二十
四日の夜の夢中に彼人の舊友佐藤丹左衛門と云ふ武士の亡魂來り告
て曰く我は藤樹寺文殊より勅命を受けて來れり貴公今度重き病に染て
報命方に危からん早く名醫を尋て灸療を作すべし余は今藤樹寺の境

内に住めり其證の爲に彼寺の庭なる石一つ持ち來れり云ふと思ふに夢覺たり翌朝夙に起て老母及び妻子を呼て夢中の告を語りて其夜被りたる臥具の中を見れば果して一の石あり夢に見しに大さ合構まで露も違はず云へば家人皆希有の思を爲し其身も實に佛の御告なることを信じ聽て藤樹寺に詣て住持の僧に其有様を語り深く文殊に冥護を祈り教の如く宜き醫師を頼て灸治をなし侍りければ何の病難にも掛らずして恙なかりけるとなり思に此梶氏は智仁勇の三徳を具し未だ君父に事て忠孝厚く殊に三寶に歸依深かりし故に斯る不思議の告を蒙りて其身の大難を免れ侍るならぬ又彼丹左衛門は同國那賀郡立江村の住人なり能く武藝に達せる故に劍術の指南を受くる者少からずして門弟の爲に常に立江寺より國主の城下に通へり然に此人

多年文殊菩薩を信じ往來の度毎に必ず此寺に詣てられしが本尊の御心にも能く叶ひ没後御眷屬となり斯る佛勅を受て梶氏に告げ侍るならん云ふ
 以上文殊菩薩を信仰し其冥益を蒙りたる因縁でありますが此外此等のことを擧げれば數限もありませぬ希くは世の信心の善男善女の諸君は尙ほ益々信心堅固にして大士深重の御恩に與り玉ふべし

明治四十年九月廿九日印刷
同 年十月五日發行

不許複製
御經類一切

攝津國武庫郡真元村字小林 平林寺住職

著述者 廣安恭壽

京都市寺町通五條上ル西橋詰町廿五番戶

發行者 藤井佐兵衛

京都市醒ヶ井通魚棚上ル佐安半井町卅二番戶

印刷者 小林庄兵衛

京都市寺町通五條上ル

佛教書肆發行所
山城屋 藤井文政堂

振替口座四五九五番

十三佛由來

勢至菩薩

藤井文政堂發兌

十三佛由來目次

第一 不動明王
第二 釋迦如來
第三 文殊菩薩
第四 普賢菩薩
第五 地藏菩薩
第六 彌勒菩薩

第七 藥師如來
第八 觀自在菩薩
第九 勢至菩薩
第十 彌陀如來
第十一 阿閼如來
第十二 大日如來
第十三 虛空藏菩薩

十三佛由來第九

僧 正 廣 安 恭 壽 述

勢 至 菩 薩

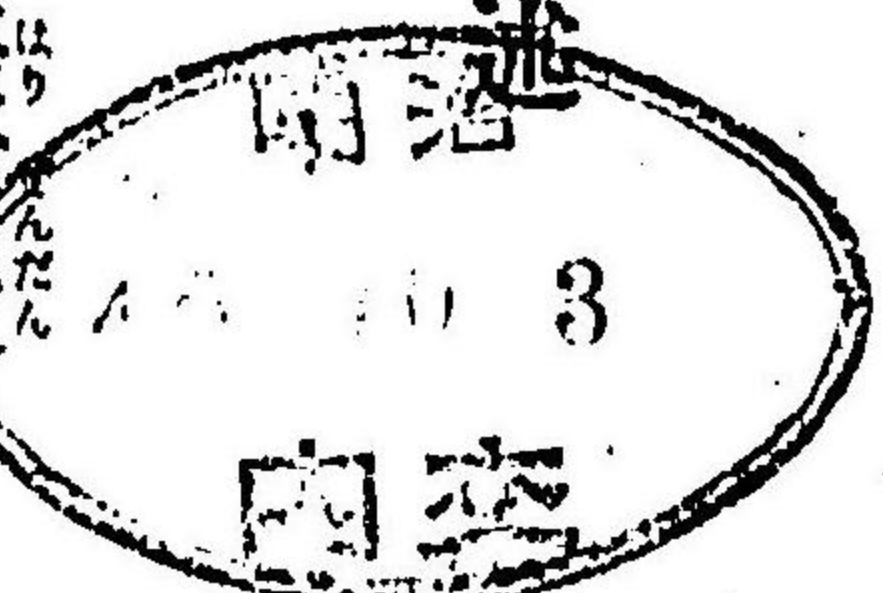
さて是より第九に勢至菩薩のこゝを御話致しますそこで矢張前取の通り三段に分けて御話致します

第一本尊の名義と體相

第二御經と眞言

第三誓願功德

先づ名義と體相の御話を致しますれば勢至とは智慧の威勢廣大なるの名にして觀經には以智慧光普照一切令離三途得無上力故に名大勢至とあり又此菩薩座時十方國土一時動搖ともあり思益經には我捉足之處震動三千大千世界及宮殿故名大勢至とも



あり又大日經疏には得大勢至如世國王大臣威勢自在故名爲大勢ごもあります

次に體相を御話致しますれば此尊は天冠を戴き玉ふ尊なるが此天冠には五百の寶華あり一々の寶華に五百の寶臺あり一々の臺の中に十方諸佛の淨妙の國土廣長の相を現し又頂上の肉髻鉢頭摩華の如し肉髻の上に於て一の寶餅あり諸の光明を盛て普く佛事を現すと云ことであります觀經に曰く復次應觀大勢至菩薩此菩薩身口量大小亦如觀世音圓光面各百二十五由旬照二百五十由旬拳身光明照十方國作紫金色有緣衆生皆悉得見但見此菩薩一毛孔光即見十方無量諸佛淨妙光明是故號此菩薩名無邊光以智慧光普照一切令離三途得無上力是故號此菩薩名大勢至此普

薩天冠有五百寶華一々寶華有五百寶臺一々臺中十方諸佛淨妙國土廣長之相皆於中現頂上肉髻如鉢頭摩華於肉髻上有寶餅盛諸光明普現佛事餘身相如觀世音第二御經之眞言

此尊の御經のこを御話致しますれば觀無量壽經の中にて此尊の眞言を讚嘆せられし文を和譯して掲くこと致します

次に大勢至菩薩を觀すへし此菩薩の身量大小亦觀世音の如し圓光の面各百二十五由旬なり二百五十由旬を照す拳身の光明十方國を照すに紫金色を作す有緣の衆生は皆悉く見ることを得但た此菩薩の一毛孔の光を見れば即ち十方無量諸佛の淨妙光明を見る是の故に是の菩薩を號して無邊光と名く智慧の光を以て等く一切を照して三途を離

れしむ無上力を得たり是の故に此菩薩を號して大勢至と名く此菩薩天冠に五百の寶華あり一々の寶華に五百の寶臺あり一々の臺の中に十方諸佛の淨妙國土の廣長舌の相皆な中に於て現ず頂上に肉髻は盡頭摩華の如し肉髻の上に於て一の寶餅あり諸の光明を盛れて普く佛事を現す餘の諸の身相は觀世音の如く等く異あることなし此菩薩行く時十方世界一切震動す地動の處に當て五百億の寶華あり一々の寶華の莊嚴高く顯はれて極樂世界の如し此菩薩坐し玉ふ時七寶の國土一時に動搖す下方の金光佛刹より乃し上方の光明王佛刹に至るまで其中間に於て無量塵數の分身無量壽佛分身の觀世音大勢至なり皆悉く極樂國土に雲集す空中に側塞して蓮華座に坐し妙法を演説して苦の衆生を度す此觀を爲すものは名て正觀と爲す若し他觀するものを

名けて邪觀と爲す大勢至菩薩を見る是を大勢至の色身相を觀すと爲す第十一の觀と名く此菩薩を觀する者は無數劫阿僧祇の生死の罪を除き是の觀を作す者は胞胎に處せむ常に諸佛の淨妙國土に遊て此觀の成し已るを名けて具足して觀世音大勢至を觀すと爲す次に眞言のここを御話致します此尊の眞言は

をんさんくさくそわか

是の眞言の中此尊の種子はサク字であります

第三誓願功德のここを御話致します此尊の誓願は智慧の威勢を以て一切衆生をして三途の獄苦を離れしむると云が此尊の御誓願であります茲に聊か此尊の御利益の一片を掲げて讀者諸君に御覽に入りますこと致します是は礦名集下の十一番に出づる因縁にて勢至菩薩

の靈像奇特の事であります紀州高野山萱屋千藏院は弘法大師御作の勢至菩薩御長一尺餘あり往古より本堂の天尊とし外に五尺餘の阿彌陀佛あり行基菩薩の作なりさて脇士とす諸人拜見して皆疑ひ居れり大佛師主の阿彌陀佛を脇士とし小像弟子の勢至菩薩を本尊とせるここ不相應なり何こそ坐位を据へ替へたらば宜しからん云と雖も八百餘年來定めある位地なれば卒爾に改め難く崇めける元録七年住持堯雄江戸に下り小石川傳通院前伊勢屋六兵衛宅に暫く寄宿せるに梅霖霽れざれば亭主幸に喜び數日留めけるに五月十三日に堯雄の夢に本尊勢至菩薩告玉はく往古より本尊として供養する故に汝等を擁護すること暫くも忘れざるに亮慧等物の意を辨せず俄に坐位を改めんとす急き此旨を告げ來せこの玉ふと思へば夢覺めぬ堯雄感涙を

流し有難思はれ早且の念誦も南山故院の本尊の前なりと觀念して勤行せらる次夜の夢も亦同じく又其次の夜の夢も同じげれば大に驚き急ぎ狀を書き調へ早便を尋て高坐に達せしめん因に亭主へも三夜の御告然かくなりと語られければ亭主も感嘆せる處へ留主居亮惠方より書面來りしを披見すれば内々諸人の批判愚僧共が所存も大佛の阿彌陀如來を天尊とし勢至菩薩の脇士とせばやと相談相決り吉日を擇て居替すべしとあり堯雄手を拍て感嘆し亭主にも告げたれば急ぎ書翰を高野に上せける高野には今日こそ吉日なれば入佛供養を勤めんとて十四五輩の會合して法用の用意ありし處へ江戸堯雄の方よりの書狀相届き披見するに三夕まで本尊の御告ありし趣委細に書き載せられければ諸僧大に驚嘆して向後坐位を改むべからざるの由御

厨子に書付堯雄の状をも相添へ後代の鑑誠として納め置き本尊の秘法を修して懺悔し祈誓して各退出せりサテ阿彌陀如來は師主なり勢至は弟従なり因果位別なり何が故に是の如くなるや謂く理趣經得自性の段の曼荼羅の如きは中胎は觀音八葉は彌陀なり大に深秘の義あり今勢至を中尊にするこも亦此義なるへし因果一如の法門は不二摩訶衍の佛なりと宥快法印の讚し玉へるも此意なり凡そ天竺震旦日本に彌陀觀音を本尊とする寺院は百が中にも七八十あり餘尊は甚だ少なし中にも勢至菩薩を本尊とするは只此一院のみなり是れ大師御作の靈像なるが故なり又世俗二十三日を以て勢至の緣日を執す故に堯雄の夢想も五月二十三日に告玉ふが勢至は念佛三昧の本誓にて極樂淨土觀音の補處なり法然上人は念佛を弘通せられけるが故に勢至

の化身なりと云ひ傳ふ然らば淨土宗の寺院には専ら此菩薩を本尊とすべきものならん

又三寶感應錄下卷三十一項雍州鄠縣の李趙待亡父の爲に大勢至の像を造る感應の事を御話せば李趙待は雍州鄠縣の人なり其父惡見を發して佛法を撥無す夢に神の責を感じて血を吐て死す趙待本より心を大勢至に歸す念佛して更に父の苦を救んが爲め三尺の勢至の金像を造る始めて彫刻を就す日大地獄震動す人皆地震と謂ふ吉凶を推して二月を経て功方に畢る夢に金人寶冠を戴けるを見云く汝ち先づ地獄を識れるや否や我は是れ大勢至菩薩なり汝ち我像を造る我汝が請に赴て此界に來入す時に擧足下足するに大千震動す三惡の衆生皆な苦を離る我れ念佛門に依も無生忍に入て十方念佛の衆生を攝す汝ち

形像を造り兼て念佛を修す其父地獄の苦を離る我授手して淨土に送
ると云ふ是の語を聞て目を擧て瞻禮せんご欲すれば忽然として夢覺
めぬ待悲喜交も集て修念廢することなかれ

又同書に唐の高宗皇帝の母長孫夫人始め高宗帝を懷て月滿て産の氣
が付き玉ふ數日を重て誕生無し大に惱み玉ふが故に醫の博士李洞玄
に詔して候せしめらる洞玄が曰く太子胎内にして手を以て母后の心
の臍を執玉へり茲に大勢至菩薩を信して手術を行へば子母の中一は
助かるべし夫人曰太子を全くせば帝繼永昌ん我れ死すとも恨無しご
李洞玄に勅を承て夫人の臍に針を刺し心の臍を徹して子の手に當る
夫人は甦して太子は全し後に天陰れば手の内に痛あり諸臣に問玉ふ
に其之に奏す太子聞て悲號し哀傷に絶ず勅して大慈恩寺を造り一百

員の僧を度して作善供養し玉へりご

此等の因縁は枚擧に違なきこと今も昔も菩薩大士の御利生は變る
ことありません希くは世の善男善女の諸氏は信心更に怠り玉はぬ様
希ふことであります

明治四十年九月廿九日印刷
同 年十月五日發行

攝津國武庫郡真元村字小林 平林寺住職

著述者 廣安恭壽

京都市寺町通五條上ル西橋詰町廿五番戶

發行者 藤井佐兵衛

京都市釋ヶ井通魚堀上ル法女牛井町卅二番戶

印刷者 小林庄兵衛

不許複製
此書は複製を許さず
翻刻を禁ず

京都市寺町通五條上ル

佛教書肆發行所
山城屋 藤井文政堂

御經類一切
振替口座四五九五番

十三佛由來

普賢菩薩

藤井文政堂發兌

十三佛由來目次

第一 不動明王
第二 釋迦如來
第三 文殊菩薩
第四 普賢菩薩
第五 地藏菩薩
第六 彌勒菩薩

第七 藥師如來
第八 觀自在菩薩
第九 勞至菩薩
第十 彌陀如來
第十一 阿閼如來
第十二 大日如來
第十三 盧舍那菩薩

十三佛由來第四

僧正 廣安 恭壽 述

普賢菩薩

さて十三佛の講話を始めましてから漸く第三段文殊菩薩まで相齊
 ましたが是より第四の普賢菩薩の御話にかゝることであります然る
 に御話の順序としては矢張前々の通り三段に分けて御話を致します
 第一本尊の名義と體相 第二御經と眞言 第三誓願と功德
 先づ本尊の名義を體相とを御話することでありますが此尊の名義は
 普賢とは梵語には三曼跋陀と云ひ漢語に譯して普賢と云ふ此普賢と
 云ふことに付て種々の説あれども行徳法界に彌滿するを普と云ひ智



德佛に隣なるが故に賢と云ふことにて凡そ此尊は等覺無垢の正位に居して慈悲普く九界に垂れ十種の行願を顯し給ふ名にて一切有情の私の徳を主る尊號であります龍猛菩薩の菩提心論と云ふ書には法爾に常に普賢の大菩提心に住すべし一切衆生は本有薩埵なるが故にこあります然れば此尊は一切衆生の菩提心を主り給ふ尊であります次に此尊の體相のことを御話致しますが此尊は讀者諸君御承知の如く頭に寶冠を戴き右の手は五智金剛の杵を持ち左の手には蓮華を持ち給ふ尊像であります其右の手は生佛の菩提心に相違あることを示し給ふ意であります又左の手の蓮華は衆生本覺の心は清淨にして譬へば蓮華の清淨にして淤泥に染まぬやうなものであると云ふことを表顯し給ふものであります

以上は名義と體相とを御話致しました是より御經と眞言とに付て御話致しませう
 第二御經と眞言

さて御經のことを御話致しますと此普賢菩薩様の御經と云ふは唐の般若三藏の譯なり華嚴經の中の普賢行願品と云ふあります又三藏の所譯にて普賢菩薩念誦法經と云ふあり又三藏の所譯にて普賢菩薩念誦法經と云ふあり其中今は普賢行願品の偈頌を翻譯して御覽に入れませう

あらゆる十方世界の中の、三世一切の人師子、我れ清淨の身語意を以て、一切徧く禮して盡して餘なし、曼荼の行願威神の力、普く一

切如來の前に現す、一身復た剎塵の身を現して、一々徧く剎塵の佛を禮す、一塵の中に於て塵數の佛あり、各菩薩衆會の中に處し、無盡の法界の塵も亦我然なり深く諸佛皆充滿することを信じ、各一切の音聲海を以て、普く無盡の妙言詞を出す、未來一切の劫を盡して佛の甚深の功德海を讚し、諸の最勝の妙華鬘、伎樂塗香及ひ傘蓋、是の如く最勝の華嚴の具を以て、我れ以て諸の如來を供養し奉る、最勝の衣服最勝の香、末香燒香蠟燭ともに、一々皆妙高聚の如にして、我れ悉く諸の如來を供養し奉る、我れ廣士の勝解の心を以て、深く一切三世の佛を信す、悉く普賢行願力を以て、普く諸の如來を供養し奉る、我昔造る所の諸の惡業、皆無始の貪瞋痴に身語意より生ずる所一切我今皆懺悔す、十方一切の諸の衆生、二乘の有學及

ひ無學、一切の如來及ひ菩薩の、あらゆる功德皆隨喜す、十方のあらゆる世間燈、最初に菩提を成就するもの、我今一切皆勸請して、無上の妙法を轉せしむ、諸佛若し涅槃を示せんご欲せば、我れ悉く至誠に勸請す、唯願は久しく剎塵劫に住して、一切諸の衆生を利樂し玉へご、あらゆる禮讚供養の福、佛の住世に轉法輪を請す、隨喜懺悔の諸の善根、衆生及ひ佛道に廻向す、我一切の如來に隨て學し普賢圓滿の行を修習す、我れ願は普く三世の覺者に隨て、速に大菩提を成就することを得、あらゆる十方一切の剎、廣大清淨の妙莊嚴、衆會諸の如來を圍繞して、悉く菩提樹王の下にあり、十方あらゆる諸衆生、願くは吾患を離れて常に安樂して、甚深の正法の利を獲得し、煩惱を滅除して悉く餘なからんことを、我菩提の爲に修行

する時、一切趣中宿命を爲し、常に出家を得て淨戒を修し、垢なく破なく穿漏なし、天龍夜叉鳩槃荼、乃至人及び非人等、あらゆる一切衆生の語、悉く諸音を以て而も法を説く、清淨の波羅密を勸修して、恒に菩提心を忘失せず、障垢を滅除して餘あることなし、一切の妙行皆成就す、諸の惑業及び魔境に於て世間道の中に解脱を得、猶ほ蓮華の水の着せざるが如し、亦た日月の空に住せども、悉く一切惡道の苦を除て、等しく一切の群生を與に樂しむ、是の如く刹塵の功を経て、十方の利益恒に盡ることなし、我れ常に諸の衆生に隨順して、未來一切の劫を盡す、恒に普賢廣大の行を修して、無上の大菩提を圓滿す、あらゆる我と同行の者、一切處に於て同く集會し、身口意樂皆同等して、一切の行願同く修學す、あらゆる我を益する

善知識、我が爲に普賢の行を顯示し、常に願て我と同く集會し、我に於て常に歡喜の心を生せむ、願くば常に面たり諸の如來、及び諸の佛子の衆の圍繞するを見奉り、彼に於て皆廣大の供を興じ、未來劫を盡して疲かれ厭ふことなけん、願くは諸佛微妙の法を持して、一切菩提の行を光顯し、清淨普賢の道を究竟して、未來際を盡して常に修習せん、我れ一切諸有の中に於て、修する所の福智恒に盡ることなく、定慧方便及び解脱、諸の無盡の功德藏を獲ん、一塵の中に塵數の刹あり、一々の刹に難思の佛あり、一々の佛衆會の中に處して、一々の雲端に三世の海あり、佛海及び國土海、我れ徧く修行して劫海を經、一切の如來語清淨にして、一言に衆音言海を具し、諸の衆生音樂の音に隨て、一々辨才海を流し玉ふ、三世一切の諸如

來、彼の無盡の語言海に於て、恒に理趣妙法輪を轉す、我が深智普
 く能く入る、我れ能く深く未來に入り、一切劫を盡して一念なる、
 三世のあらゆる一切劫、一念際として我皆入る、我れ一念に於て三
 世の、あらゆる一切の人師子を見、亦常に佛境界の中に入る、如幻
 解脱及び威力、一毛端極微の中に於て、三世の莊嚴刹を出現す、十
 方の塵刹諸の毛端、我等深く入て而かも嚴淨す、あらゆる未來の照
 世燈、成道轉法して群生を悟らしむ、佛事を究竟し涅槃を示す、我
 皆往詣して而かも親近す、速疾周徧神通力、普門徧入大乘力、智行
 普修功德力、威神普覆大慈力、徧淨莊嚴勝福力、無著皆依智慧力、
 定慧方便諸威力、普能積集菩提力、清淨一切善業力、摧破一切煩惱
 力、降伏一切諸魔力、圓滿普賢諸行力、普能嚴淨諸刹海、解脱一切

衆生海、善能分別諸法海、能甚深入智慧海、善能清淨諸行海、圓滿
 一切諸願海、親近供養諸佛海、修行無倦經劫海、三世一切の諸如來
 最勝の菩提の諸行願、我皆供養して圓滿して修し、普賢の行を以て
 菩提を悟る、一切の如來に長子あり、彼名號を普賢等と曰ふ、我今
 諸善根を廻向するに願くは諸の智行悉く彼に同じ願くは身口意恒に
 清淨にして、諸行向上も亦復然らん、是の如くの智慧を普賢と號す
 願は我彼と皆同等ならん、我れ徧く普賢の行、文殊師利の諸大願を
 淨むることを爲し、彼事業を滿て盡く餘なし、未來際劫恒に儘むこ
 こなし、我修する所の行量あることなし、無量の功德を獲得し、無
 量の諸行の中に安住して、一切の神通力を了達す、文殊師利勇猛の
 智、普賢の惠行亦復然なり、我今諸善根を廻向して、彼の一切に隨

れ常に、三世諸佛の稱嘆し給ふ所の、是の如き最勝諸大願を修學し給ふなり、我今諸善根を廻向することは、普賢殊勝の行を得んが爲めなり、願くば我れ命終せんご欲する時、盡く一切の諸障等を除き面たり彼の佛阿彌陀を見、即ち安樂刹に往生することを得、我れ既に彼國に往生し已て、現前に此大願を成就し、一切圓滿して盡く餘なし、一切衆生海を利樂せん、彼佛衆會悉く清淨なり、我等時に勝蓮華に於て生じて、親く如來無量の光を觀、理前に我が菩提の記を彼如來授記を蒙り已て、身を無數百俱胝に化し、智力廣大にして十方に徧し、普く一切衆生界を利せん、乃至虛空世界盡き、衆生及び業煩惱盡ん、是の如く一切盡くる時なし、我が願究竟して恒に盡くることなし、十方のあらゆる無邊刹にして、衆寶を莊嚴して如來に

供し、最勝の安樂にして天人に施して一切刹微塵劫を經ん、若し人此勝願王に於て、一たび耳に經て能く信を生じ、勝菩提を求めて心に渴仰す、勝功德を獲ること彼に過ん、即ち常に惡知識を遠離し、永く一切の諸惡道を離れ、速に如來無量の光を見、此普賢最勝の願を具せん、此人善く勝壽命を得、此人善く人中に來て生じ、此人久しからず當に、彼の普賢菩薩の如き行を成就すべし、往昔智慧力なきに依て、造る所の極惡五無間も、此普賢の大願王を誦せば、一念速疾に皆消滅し、族姓種族及び容色、相好增惠咸く圓滿し諸惡外道も摧くこと能はず、三界の所應供となるに堪へたり、速に菩提文樹王に詣し、坐し了て諸の魔衆を増伏し、等正覺を成し法輪を轉し、普く一切の諸の含識を利せん、若し人此普賢の願に於て、讀誦受持し

及び演説し給ふ、果報唯佛のみ能く證知し給ふ、決定して勝菩提道を獲ん、若し人此普賢の願を誦せん、我れ少分の善根を説く、一念に一切悉く圓滿にして、衆生清淨の願を成就せん、我此普賢殊勝の行、無邊の勝福皆廻向す、普く願くは沈溺の諸衆生、速に無量光佛の刹に往くことを

次に眞言のここを御話せば此尊の御眞言は
をん、さんまや、さこばん

と申しますが此尊の種子はアン字でありますアン字は遍際の義にして普賢菩提心一切衆生に遍際し闕限なからしむるを以て此尊の本誓と給ふが故に此アン字を以て種子となし給ふことであります

第三誓願と功德を御話致しますれば此尊は一切衆生の菩提心を加護

し無福の輩をして善福を得せしめ盡空法界色身三味の威徳を以て諸の衆生界菩提一乗の勝益を施し乃至究竟解脱の廣濟殊に信受供養菩提心増長力誓願あるは此尊の御誓願なり

以上は此尊の御内證たる御誓願のここを御話致しましたが處で此尊の御靈益を蒙りし事跡を御話せば茲に三寶感應録の中にある宋の曙照太后普賢菩薩の像を造り感應を得し事を述べましかふ宋の曙照太后大明四年に普賢菩薩を造て寶輿白象に乗せて中興禪房に安す因て寺に講説す其年の十月八日に齊畢て坐會を解す僧二百人時に寺宇始めて講せり帝甚た心を留む忽ち一僧あり座次に預る風毘秀擧れば堂驚き騰く忽ち復た見へず列筵同視す是れ普賢菩薩の應現なりと稱嘆

せりん

又窺仲法師普賢の像を造て難を免れ印度に到る感應の事を御話致し
 ますれば窺仲法師は交州の人にて印度に到らんと志す即ち發願して
 普賢の像を造て祈請して曰く普賢大士に順次往生の願あり豈に貧道
 の誠志を捨て給はんや更に夢を感ず普賢白象に乗して仲が頂を摩て
 言く汝ち誠志あり將に印度に往んさす若し留滯あらば我れ必ず救
 はんと云ふ夢覺めて歡喜して明遠と同船して南海に泛ぶ忽ち惡風に
 遭て羅刹國に墮せんと思ふ仲普賢を專念するに其像船上に現して風
 靜にして獅子國に向ふに又復摩竭魚の難に遭ふ仲專ら普賢を念す其
 像船上に現して大魚口を合して去る難を免れて師子國に到り更に西
 印度に向て玄照法師に見へ共に印度に請して菩提樹を禮し更に竹林
 園に別て微疾に遭ふ夢の如くにして普賢を見て聖力に依て本願を滿

足して六根淨を獲て恨を生せしむることなかれと遺書に注して卒云
 云ことあり
 又高陞の秦の安義普賢の救療を蒙る感應の事を述べ秦の安義は高
 陞の人なるが少より長するに至るまで放鷹射を以て家業と爲し、一
 日殺す處幾千なるを知らず月より月に至り歳より歳に至るまで殺生
 都て思ひ計り數ふべからず邪見の人の曰く安義殺を好むとも身に恙
 なくと生年五十又八にして忽ち瘡病を發して濃血身を穩して臭氣親
 附すべからず義の婦日出の時に瘡を見るに一々の炮皆雉の背に似た
 り希有の心を生ず兒子を呼ふに皆な雉の背に似たりと云ふ更に親屬
 に告く凡そ見る處あるに皆な雉の背の唇に似ると云ふ唇動くが如し
 爾の時使者を馳て僧道俊法師を請ふ以て其狀を明す俊の曰く此人鷹

獲の罪報重く積み現身に尙還て啖食する處自ら悔ゆるに非んば甚だ
 救療し難し安義に問て曰く身心如何答て曰く身心蠢くが如く目を閉
 れば無量の鳥獸骨肉を唯齜啄喰するを見る願くば師見て救療せよ俊
 の曰く現苦斯の如く況や復た後の苦をや須らく其罪を懺ずべし義が
 曰く願くは慈訓を垂れ玉へ俊の曰く普賢の像を造りなば方に潜を謝
 するを得ん斯の如くの頃に悶絶して氣絶へぬ親屬啼泣せり俊勸めて
 形像を造て普賢の懺を修せしむ三日あつて方に醒めて曰く吾れ始て
 見しかば馬頭牛頭目を怒して猪製して曰く汝ち愚にして多人の殺す
 處の生雉鷄等の類身に入て皮肉を咀嚼し鹿羊等の廳に塞ひて各々非
 分に命を奪ることを詎ふ王愬への狀に依て使を遣して召し問に違拒
 すべからむ即ち返傳四反火車の中に入れ忽ち追て將に途中に還らん

とす奈何ともすることなし一人の其身を摺り磨するに値ふ勢苦暫く
 止む遂に王廐に至て百千萬億の禽獸扭械枷鎖して縛り返て罪人を縛
 するを爾の時先の沙門來れり王座より起て合掌して立てり沙門廳に
 入て座に就き王次に入て座せり沙門曰く此人は是れ我壇越なり親屬
 爲めに我を供養して其罪を悔也將に之を放て赦さん王の曰く阿師
 の言ふ所堅く拒むべからむ今殺す所の有情の難に依て方に召して之
 を勘ふ此事如何沙門の曰く朋友知識人間に在り爲に懺悔を修して諸
 の殺す所の生類に廻向す怨むるもの皆愆心を解て方に苦を脱す王の
 曰く實に師の説の如し將に放ち還すべし王座より起て沙門に禮して
 曰く阿師共に還り玉へ爾の時沙門安を將て出つ忽ち古家を見れば錫
 を以て口を開き安を入れて豁然として見へず是の時親屬安に謂て曰

く汝か爲に像を造る像即ち安を救ふと安此語を聞て喜悲交々集りて
 身の瘡方に愈へ氣力調和す更に所有を捨て、其像を供養す髮を削り
 出家して家族子孫を誡めて曰く電露の身を以て重罪を犯すことなか
 れ一毛の生命を殺せば多劫殃を受く冥事皆實なり過を免るべからず
 唯此言を留めて去る處を知らず
 又齊の上定林寺の釋の普明と云へるもの普賢菩薩の身を見たる感應
 の事を述べれば齊の普明懺悔を業として常に法華を誦するに勸發に至
 る毎に輒く普賢大士白象に乗して其前に在すを見たりと
 以上普賢菩薩靈驗の因縁を述べたることなるが是等の類を擧ぐれば
 枚擧に遑なく又其靈感昔に限らず今も信する處に現るゝことなれば
 世の善男善女の人々は努力々々信心を怠り玉ふ勿れ

明治四十年九月廿九日・印刷
 同 年十月五日 發行

著述者 攝津國武庫郡真元村字小林 平林寺住職 廣安恭壽

發行者 藤井佐兵衛

印刷者 小林庄兵衛

不許複製

佛教書肆 發行所 山城屋 藤井文政堂
 御經類一切

京都市寺町通五條上ル
 振替口座四五九五番

十三佛由來

地

藏

經

疏

藤井文政堂發兌

十三佛由來目次

第一 不動明王
第二 釋迦如來
第三 文殊菩薩
第四 普賢菩薩
第五 地藏菩薩
第六 彌勒菩薩

第七 藥師如來
第八 觀自在菩薩
第九 勢至菩薩
第十 彌陀如來
第十一 阿闍如來
第十二 大日如來
第十三 虛空藏菩薩

十三佛由來第五

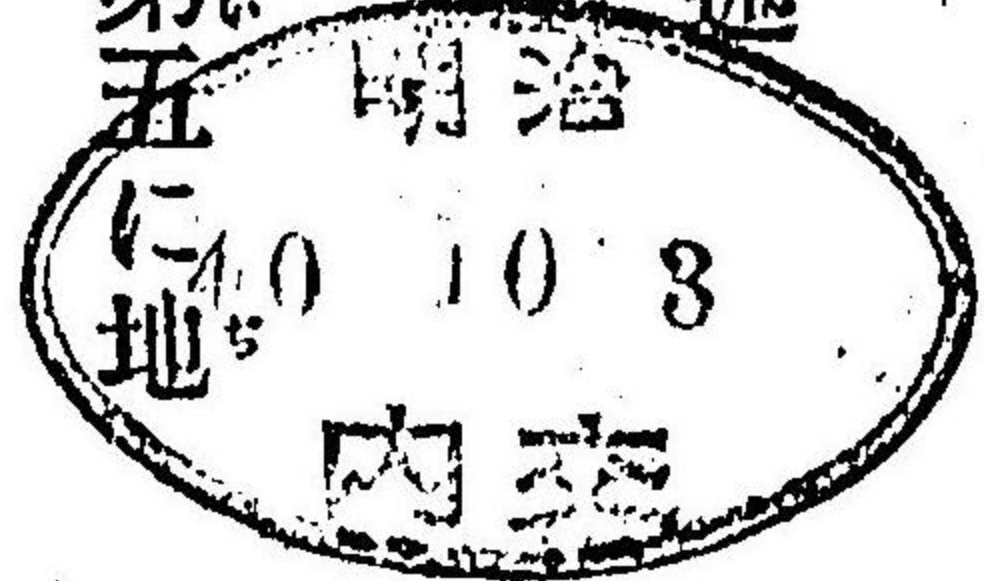
僧正 廣安 恭壽 述

地藏菩薩

さて十三佛の中第四普賢菩薩は御話して來ましたが是より第五に地藏菩薩様の御話を致します

第一本尊の名義と體相 第二御經と眞言 第三誓願と靈驗

先づ此尊の名義を御話せば此地藏の名義を解くに種々の説あれども地とは地獄にて此地獄の衆生に於て已れを助くるの寶藏となるべきものは此尊の大悲の御救濟であるから地藏と名くと云ふ是は地獄の衆生より名を得たる尊號であります次に體相のことを御話致します



れば此尊は左手に一顆の寶珠を持し一切衆生の願望を満足せしめん。この御内證を標し右の手には錫杖を持し智行功能の本意を顯はし玉ふ其内錫杖も色々ありますが二股六環は伽葉佛の制四股十環は釋迦佛の制なりと申ます要するに五百問事には錫を持するは能く惡虫毒獸を警むる故なりと云又此尊の住所を御話するに此尊は佉羅帝耶山と云ふ山に住し給ふと然れども是は只一往の住所にして此尊は六道能化の大道師にして三途六趣に變現示現し給ふ佛なるが故に一所の所住とて定まりたることはありません以上先づ名義と體相との事は此位のここにして置き次に御經と御眞言の御話を致します

第二御經と眞言

此尊の御經を話ますれば寶叉難陀の譯なる地藏本願經と云ふ上中下三卷のものがあります品數十三とあり忉利天宮神通品第一分身集會品第二觀衆生業緣品第三閻浮衆生業感品第四地獄名號品第五如來讚題品第六利益存亡品第七閻羅王衆讚嘆品第八稱佛名號品第九校量布施功德品第十地神護法品第十一見聞利益品第十二囑累人天品第十三の十三品あり今十三品皆和譯して出せばと思ふなれども餘り長くなりなますから見聞利益品の一品文を和譯して置くこと、致します見聞利益品

爾の時に世尊頂門の上より百千萬億の大毫相の光を放ち玉ふ謂はゆる白毫相光、瑞毫相光、大瑞毫相光、玉毫相光、大玉毫相光、紫毫相光、大紫毫相光、青毫相光、大青毫相光、碧毫相光、大碧毫相光

紅毫相光、大紅毫相光、緣毫相光、大緣毫相光、金毫相光、大金毫相光、慶雲毫相光、大慶雲毫相光、千輪毫光、大千輪毫光、寶輪毫相光、大寶輪毫相光、日輪毫光、大日輪毫光、月輪毫光、大月輪毫光、宮殿毫相光、大宮殿毫相光、海雲毫相光、大海雲毫相光、頂門の上にて是の如き等の毫相光を放ち已て微妙の音を出して諸の大衆天龍八部人非人等に告給はく聽け吾れ今日忉利天宮に於て地藏菩薩の人天の中に於て利益等の事不思議の事超聖因の事證十地の事畢竟不退阿耨多羅三藐三菩提の事を稱揚し讚嘆し給ふことを此語を説き給ふ時會中に二人の菩薩摩訶薩あり觀世音と名く座より而かも超て胡蜷合掌して佛に白して言く世尊此地藏菩薩摩訶薩大慈悲を具して罪苦の衆生を憐愍して千萬億の世界に於て千萬億の身を現しあ

らゆる功德及び不思議威神の力我れ世尊の十方無量諸佛と共に異口同音に地藏菩薩を讚嘆して云ひしを聞しに假使過去現在未來の諸佛其功德を説とも猶し盡すこと能はずと向きには又世尊の普く大衆に告げ給ふことを蒙りしかども地藏菩薩の事を稱揚せんご欲す唯願くは世尊現在未來一切の衆生の爲めに地藏不思議の事を稱揚して天龍八部をして瞻仰して福を獲せしめ玉へ

佛觀世音菩薩に告げ玉はく汝ち娑婆世界に於て大因緣あり若しくは天若しくは龍若しくは男若しくは女若しくは神若しくは鬼乃至六道罪苦の衆生汝が名を聞くもの汝が形を見んもの汝を戀慕せんもの汝を讚嘆せんもの是の諸の衆生無上道に於て必ず退轉せば常に人天に生じて具さに妙樂を受く因果將に熟せんごす佛の授記に遇ふ汝今大

慈悲を具し衆生及び天龍八部を憐愍して吾が地藏菩薩の不思議利益の事を宣説せんことを聽んごす汝當に諦に聽くへし吾今之を説かん觀世音の言く唯然り世尊願樂して聞んご願ふ佛は觀世音菩薩に告給はく未來現在諸の世界の中に天人の天福を受けて盡くる時は五衰の相現するここあり或は惡道に墮するものならん是の如きの天人若しは男若しは女現相の時に當て或は地藏菩薩の形像を見或は地藏菩薩の名を聞て一瞻一禮すれば是れ諸の天人天福を轉増して大快樂を受け永く三惡道に墮せん何に況や菩薩を見聞して諸の香華衣服飲食寶貝瓔珞を以て布施供養せば獲る所の功德福利無量無邊ならん復次に觀世音菩薩若しは未來現在諸の世界の中六道衆生命終る時に臨て地藏菩薩の名を聞て得るここ一聲耳根に歴れば是の諸の衆

生永く三惡道の苦を歴ず何に況や命終る時に臨て父母眷屬其命終の人の舍宅財物寶具を將て地藏の形像を惣像し或は病人未だ終らざるの時眼耳にて聞かじめ道ふことを知らず、眷屬舍寶財物寶具等將て其自身の爲めに地藏菩薩の形像を惣畫す是の人若し是業報にして重病を受くへき者は斯の功德を承けて尋て即ち障愈し壽命増益せん是の人若し是業報にして命盡せんには應に一切の罪障未障なるべくして惡趣に墮すべき者も斯の功德を承けて命終の後ち即ち人天に生して勝妙の樂を受け一切の罪障悉皆消滅せん復次に觀世音菩薩若しは未來世に男子女人あり或は乳哺の時或は三歳五歳十歳以下の父母を亡失し乃至兄弟姉妹を亡失す是の人年既に長大にして父母及び眷屬を思惟せば何れの趣に落在し何れの世界に

生し何れの天中に生することを知らず是の人若し能く地藏菩薩の形像を塑畫し乃至名を聞き一瞻一禮すること一日より七日に至るまで初心を退することなく名を聞き形を見て瞻禮し供養せば是の人眷屬假因業の故に惡趣に墮する者の計るに當に劫數なるへし斯の男女兄弟姉妹地藏菩薩の形像を塑畫して瞻禮する功德を承けて即ち解脱せん人中の天に生じて勝妙の樂を受くる者も即ち斯の功德を承けて轉々聖因を増して無量の樂を受けん是の人更に能く三七日の中に一心に地藏菩薩の形像を瞻禮し其名字を念すること萬返に満たば當に菩薩の無邊身を現して具に此人の眷屬の生する界を告ぐることを得べし更に能く毎日菩薩の名を念すること千返千日に至らば是の人當に菩薩の所在の土地鬼神を遣はして身を終るまで衛護することを

得へし現世衣食豐益して諸の疾苦なく乃至横事其門に入らず何に況や身に及んや是の人畢竟して菩薩の摩頂授記を得ん復た次に觀世音菩薩若しくは未來世に善男子善女人あつて廣大の慈心を發して一切衆生を濟度せんを欲する者の無上菩提を修せんを欲するもの、三界を出離せんを欲する是の諸人等地藏の形像を見及び名を聞くものは至心に歸依し或は香華衣服寶貝飯食を以て供養し瞻禮せば是の善男善女等所轉速に成して永く障導なからん復次に觀世音若しくは未來世に善男善女人あつて現在未來百千萬億等の願百千萬億等の事を求めんを欲せば但た當に地藏の所願所求悉く皆成就せん復た地藏菩薩大慈悲を具して永く我を擁護せんを願は、是人睡眠中に於て即ち菩薩の摩頂授記を得ん

復次に觀世音菩薩若し未來世に善男子善女人大乘經典に於て深く珍重を生じて不思議の心を發し讀んご欲し誦せんご欲し縱ひ明師の教も入視して熟せしむるに遇へごも旋得の旋忘し動もすれば年月を経て讀誦すること能はず是の善男子等宿業障あつて未だ消除することを得ず故に大乘經典に於て讀誦の姓なし是の如きの人地藏菩薩の名を聞き地藏菩薩の像を見具さに本心を以て恭敬し陳白し更に香花衣服飲食一切の玩具を以て菩薩を供養して淨水一盞を以て一日一夜を経て菩薩の前に安し然して後に合掌し請ひ服し首を廻らして南に向ふ口に入れん時に臨で至心に鄭重なるべし服水既に畢て五辛酒肉熾欲妄語及ひ諸の殺害を慎むこと一七日或は三七日是の善男子善女人睡夢の中に於て具さに地藏菩薩無邊身を現して是の人の處に於て灌

頂水を授け給ふを見て其人夢覺て即ち聰明を獲ん應さには是の經典一ひ耳根に歴ば即ち當に永く記して更に一句一偈をも忘失せざるべし復次に觀世音菩薩若しは未來世に諸人等あり衣食足らず求むることには願に乖き或は病疾多く或は凶衰多く家宅安からず眷屬分散し或は諸横事多く求めて身に忤ひ睡眠の間多く驚怖あらん是の如き人等地藏の名を聞き地藏の形を見て至心に恭敬し念して萬返に滿ては是の諸の不如意の事漸々に消滅して即ち安樂を得衣食豐益し乃至睡夢の中に於ても皆悉く安樂ならん復次に觀世音菩薩若しくは皆未來世に善男子善女人あつて或は治生に因り或は公私に因り或は生死に因り或は急事に因り山林の中に入り河海乃し及ひ大水を過き渡り或は險道を経ん是の人先づ當に地藏

菩薩の名を念すること萬返なるへし過くる處の土地鬼神衛護して行住座臥永く安樂を保たん乃至虎狼獅子一切の毒害に逢ふとも之を損するこそ能はむ

佛觀世音菩薩に告給はくそれ地藏菩薩は閻浮提に於て大なる因縁あり若し諸の衆生の見聞利益等の事を見て百千劫の中説とも盡すこと能はず

是の故に觀世音汝ち神力を以て是經を流布し娑婆世界の衆生をして百千萬劫永く安樂を受けしめよ

爾の時世尊而かも偈を説て言く

吾れ地藏の威神力を觀するに、恒河沙劫に説くとも盡しかたし、若しくは男若しくは女若しくは龍神、報盡て應當に惡道に墮すへし、

至心に大士の身を歸依せば、壽命轉増して罪障に除かん、少くして父母恩愛を失へるもの、未だ魂神何れの趣に在ることを知らず、兄弟姉妹及び諸親、生長せし以來皆識らんも、或は大士の身を塑し或は畫し、悲悉瞻禮して暫くも捨てず三十日中其名を念せば菩薩當に無邊の體を現して其眷屬斷生の界を示すべし、縱令惡趣に墮するも尋で出離せん、若し能く是の初心を退せずんば、即ち摩頂聖記を受くることを獲ん、無上菩提を修し、乃至三界の苦を出離せんご欲んもの、是人既に大悲心を發し、先づ當に大士の像瞻るべし、一切の諸願速に成就して、永く業障の能く遮止する無らん、人あり發心して經典を念し、群迷を度して彼岸に超へしめんご欲す。是の願不思議を立つと雖ごも。旋、讀めば旋念忘れて廢失多し。斯の人業障惑

あるが故に。大乘經に於て記すること能はず。地藏を供養するに香花を以てし。衣服飯食諸の玩具。淨水を以て大士の前に安くこと。一日一夜にして求めて之を服し。慳重の心を發し殺害することなく至心に大士の名を思念せば、即ち夢中に於て無邊を見ん、覺め來て便ち利根の耳を得ん、是の經耳聞に歷れば。千萬生の中にも永く忘れざるべし。是の大士の不思議を以て能く斯人をして此惠を獲せんむ。貧窮の衆生及び疾病、家宅凶衰眷屬離れ。睡夢の中悉く安からず。求むるもの乖違して稱ひ遂くることなきも。至心に地藏の像を瞻禮せば。一切の惡事皆清滅して。夢中に至て盡く安きことを得ん衣服豐饒にして神鬼に護らる。山林に入り及び汝を渡らんご欲して毒惡禽獸及び惡人鬼神惡鬼并に惡風。一切の諸難諸の苦惱。但た當

に地藏菩薩大士の像を。瞻禮し及び供養すべし。是の如き山林大海の中。應に是の諸惡有消滅し。觀音至心に吾説を聽け地藏無盡の不思議。百千萬劫説くも周からず。廣大士是の如きの力を宣ふ。地藏の名字人若し聞き。乃至像を見て瞻禮せんもの。香華衣服飯食を以て奉し、供養せば百千妙樂を受ん。若し能く是を以て法界に廻せば。畢竟成佛して生死を超ん。是の故に觀音汝當に知るべし。普く恒沙の諸の國土に告くことを以上御經を和譯して御覽に入れましたが次に眞言のことを御話致します眞言は
をんかかかび、さんまゑい、そわか、
是は此尊の御眞言でありますが其中種子と申はカ字でありますカ字

は因業の義にして衆生の菩提心を因として方便引心して拔苦與業し給ふが故に因業のカ字を以て此尊の御内證たる自心の心眞言となし給ふごとであります

第三誓願と功德

さて此尊の御誓願のことを御話致しますれば此尊の御誓願は實には三界の有情を濟度せんとする能滿願の大願なれば是誓願も無量無邊なれども且く十二の誓願を以て衆生を濟渡し給ふ一には獄苦代受の願として一切衆生の爲に地獄の苦を代りて受け玉ふ御誓願なり二には餓苦代受の願として一切衆生の罪業の報ひとして受くへき餓鬼道の苦を受け呉れ玉ふ御誓願であります第十三畜苦代受の願として一切衆生畜生界に生じて苦を受くるに代て苦を受け呉れ玉ふ御誓願なり第四

修羅救苦の願として阿修羅界として日夜に劔を以て相争ふ國土の人民の苦に代て苦を受け玉ふ願であります第五三昧入定を願の願是れ菩薩有縁の衆生と雖も愚鈍散亂にして三昧を成し難きものゝ爲には此尊の大悲誓願力を以て方便誘引して三昧に入らしめんとする願であります第六衆生増壽の願是れ此尊を信念する衆生をして短命を免れて長壽ならしむるの御誓願なり第七病苦代受の願是れ其病苦には四大不調の病あり業病鬼病等種々數多ありと雖も此諸の病者深信に菩薩を稱念せんには誓て其病告を除て必ず平癒せしめんご願ひ玉ふ御誓願なり八には王難代苦の願是れ暴君ありて無辜の人民を誅し非理の刑を受くる時無實の罰を受くる時非道にして命を殞す時讒訴を蒙り羅織に嬰る時等此尊を念するものは其災難を免れしめ玉ふ御誓

願であります九には怨賊離苦の願是れ怨賊さて人を殺し財を奪ふものにて是等の難に遇ふ時此尊を一心に稱念せんには強盛無道の怨賊皆悉く慈心を起して黨類を延ひて遠離せしめ給ふの御誓願であります十には貧苦救済の願是れ此尊は如意寶珠を捧て一切歸依稱念する衆生の爲に所求を満足せしめ給ふ御誓願なり十一には官位所求の願其徳あつて位卑く其君に云はんごするも能はざるものあり其道を行はんとて官位を望むものゝ爲めの御誓願なり第十二に命終現前の願是れ假令平常此尊の御誓願を知らず不信の輩も命終に臨んで纒かに此尊の名號を稱念する輩には尙ほ之を捨給はず身を現して救済し玉ふ御誓願であります

次に其功德のここを御話致しますれば御誓願はかくの如くであります

すから其御功德も廣大なものであります是より其功德靈驗に付て正しく御利益を蒙りた人の話をして存略致します
 往昔高野山に淨眞院と云寺あり住寺に睿澄闍梨と云あり享保五年の春一字の堂を造營するに番匠木挽日傭等毎日多く入込ける節大和吉野郡宮瀧村の住人登山して御長三寸許の地藏尊一軀を持參して曰には此尊像は久しく我家に傳へて守とせり蓋觸分明ならずと雖も高祖大師の御作にして火除地藏とて靈驗新なれども私家宿福少きゆへに朝夕の煙も絶々に渡世の爲に暇なく自然と信心も疎かになりぬ若し深信供養の人に譲りて朝夕に供養を受けしめんにはさての事に睿澄欽で拜し價は縁の熟する時と先つ其寺に預り修法念誦し供養し奉らんご佛壇に安置せらる爾の後三日過て夜半頃火事よと呼聲寢耳に

入らぬ造營最中にて材木柿屑取散したる時なれば寺中の者共を呼び
 起し火事は何地ぞ火は見へぬか騒ぎ廻れど何れも火事のありたる
 形も見へず讀人口を揃へて御疲れの妄想にてこそあらめ心靜に安眠
 し玉へとて皆衾を蒙りて臥しぬ睿澄猶ほ心元なく材木小室の邊りを
 點檢せらるゝに柴部屋の傍に鋸切の屑が堆くなりたるもの火か一面
 廣かり既に燃へ上らんせしを見付て伽子共を起して早く打消して
 大火と成さざりきは偏に地藏菩薩靈像の御告にて睿澄閻梨も益々信
 仰せられしと是れ礦石集にある話なり
 茲に又地藏菩薩に女子を祈て授け玉ふ事を御話せば神佛感應錄の後
 集に載せり京都岩神通に信心なる夫婦あり或時夫は婦に語らく我々
 男子は餘多あれども女子一人もなければ病ひ煩ひなごする時も眞個

に看病するものなし他の娘の親に親みし事を見るに付けても浦山敷
 しいかゞせんと言ひければ妻の曰く誠や地藏菩薩は御慈悲深く御座
 しませば一向に頼み奉て見侍りなんやと云へば夫の曰く我も斯く思
 ひ寄りしぞがしイザさらば壬生の菩薩を御頼申すべしと夫婦相伴ひ
 參て至心に祈けり是より後折々歩を運びけるに或夜妻の夢に地藏菩
 薩端嚴なる粧ひにて不圖入り來らせ玉ひて持給へる錫杖の先を彼の
 妻の口へ入れさせ玉ふと見て夢覺ぬ彼の妻打驚きて其由を夫に語り
 ければ夫申けるは其れは定めて女子を與へ玉はんとの瑞相なるべし
 と悦びけるが其夜明て妻心持例ならず煩はしければ如何なることと
 親しき人々尋ね問ひけるが果して懷妊に極りけり既に満月に及で玉
 の如き女子を生めり夫婦は申に及はず眷屬各々會ひ來りて悦び賑ひ

にけりさて月日を経に隨ひて美しく賢きこと言はん方なく十六歳に
 至りぬる頃父母彼の娘を縁に付んこて様々用意する様を見て御兩人
 様には何をか營ませ玉ふにや我は頓て死に侍りなんものをと云へば
 父母は大に驚きて是は忌々し何事を云ふぞ夫裡に色よく形ち健やか
 にして何の病もなきに斯るここそ心得ぬよしみしふ心にかけて悲
 みけり彼の女の云やう生者必滅の世の習ひにて侍れば誰れかは止り
 侍るべき假令色麗しく形健かなりこて頼み果つべき浮世にあらず唯
 だ願ふべきは菩提の道にて候へこ却て父母を勧めけり斯くて幾程な
 く煩ひつき手足彼是痛む由云ひけるが次第に頼み少くなりけり父母
 嘆き惑ふこといはん方なく或日申けるは我は今日日中に果てん父は
 何處に居ましけんにやと尋ければ折節父は東寺へ参りけり娘申ける

には早く歸らせ玉へかし御暇乞申たしと侍兼けるが程なく歸りぬ時
 の彼の娘父母に向ひ日頃の深恩を蒙りし事を懇に謝辭して睡るが如
 く終りけり父母夢め幻の如く心地して哀み宛も腸を断ち中々跡に永
 ふべきとも覺へず特に年頃他に勝れて孝行なりしは今は思の種なり
 けり是より厭離の心深くなり菩提の信心も彌や増しけるこそ或律師
 の許に至りて泣で自ら語りけると云ふ實に菩薩應化の大悲心現に童
 女となり來らせ玉ひ彼が願に應してまめやかに孝養を盡し世の無常
 を示して菩薩の道に入れしめ玉ふものなりと知るべし吁大悲利物の
 方便不可思議なりと云へし
 又地藏菩薩の教に由て百卷の心經を讀誦して命を延る事を御話せば
 是又神佛感應錄後集に載する處なり勢州山田大覺山正法寺は當初真

言宗の開基なり中古に至て大勝智雄禪師の禪刹に改められしより以來代々境内の堂の中に観音地蔵の靈像を安置す何れの頃よりか誰れの安置し奉りしと云を知らず俱に靈驗顯著なり寛文戊申の年現住寂菴禪師重病に罹り治療術を盡すも雖も曾て効なし日を遂て頼少くなり夜に夢に端嚴なる僧の來て告て曰く我は當寺の地藏なり此度の病性甚だ治し難し更に藥力に及ぶ所にあらず我に延命の法あり一座百卷の般若心經を讀誦せしめなは報命を延ること七年ならんぞ教へ玉ふと見て夢覺めぬ禪師深く感嘆して即ち僧侶を請し如法に讀誦ありければ病患は速に癒へて懸記の如く其後七年の春に世壽六十九歳にして示寂せられき維れ正寶甲寅の歳の事なりとぞ普門禪師の編纂せる地藏菩薩の應現新記にもものせられき

以上地藏菩薩靈驗功德のこを御話致しましたたが世の善男善女の人々尙ほ大士應現の利益努力々々忽にし玉ふことなかれさて以上三科に分て地藏菩薩の由來を御話致し現しましたたが特に此尊を十三佛の中第五に置き又五七日の本尊とするに付て一言御話致します是は別段のこもありませんが此尊は外の諸佛菩薩に殊んして別して三界六道の衆生を憐愍し濁惡の群類を度し玉ふ大悲利生の尊なるが故に苟も此五七日の中陰に當り此尊を彫誦し或は其種子を供養するときは亡者無始の罪業を消滅して永劫の輪廻を離れ有縁の淨刹に至るこを得るこであります

明治四十年九月廿九日印刷
同 年十月五日發行

不許複製

攝津國武庫郡良元村字小林 平林寺住職

著述者 廣安恭壽

京都市寺町通五條上ル西橋詰町廿五番戸

發行者 藤井佐兵衛

京都市醒ヶ井通魚棚上ル佐安牛井町卅二番戸

印刷者 小林庄兵衛

京都市寺町通五條上ル

佛教書肆 發行所 山藏屋 藤井文政堂

振替口座四五九五番

十三佛由來

彌勒菩薩

藤井文政堂發行

十三佛由來目次

第一 不動明王
第二 釋迦如來
第三 女殊菩薩
第四 普賢菩薩
第五 地藏菩薩
第六 彌勒菩薩

第七 藥師如來
第八 觀自在菩薩
第九 勢至菩薩
第十 彌陀如來
第十一 阿闍如來
第十二 大日如來
第十三 虛空藏菩薩

十三佛由來第六

僧正廣安恭壽

彌勒菩薩

さて是より第六彌勒菩薩のことを御話致します是又矢張三段に分て

御話致します

第一本尊の名義と體相

第二御經と眞言

第三誓願と功德

先つ此彌勒菩薩の名義を御話致しますれば彌勒は姓にして翻して慈氏と云ふ過去の時に曇摩流支と名付くる國人を慈育するが故に慈氏と名く此事觀下生經に時修梵摩即ち子の爲に字を立て、名て彌勒と云ふとあります次に體相の事を御話致しますれば獅子座寶蓮華の上



に結伽趺坐し玉ふの身五色の寶冠を戴き二手に法界定印にして五輪の塔婆を置き玉ふ御體相であります

次に御經と眞言

是より御經の御話を致しますに劉宋居士涅槃京聲の譯佛說觀彌勒上生兜率陀天經と云があり鳩摩羅什に譯なり佛說彌勒下生經と云があり又東晋の譯なる佛說彌勒來時經と云があり唐義淨の譯佛說彌勒下生成佛經と云があり竺法護の譯佛說彌勒成佛經と云があり以上六部の中後五部は此尊當來成佛說法度生の相を説ける大同小異の本なり今上生經の中の菩薩上生の說相の一段を和譯して御覽に入れることゝ致します

爾の時に優婆離即ち座より起て衣服を整へ頭面に禮を作して佛に白

して言く世尊兜率陀天上に乃ち是の如く極妙の樂事あり今此大士何れの時にか閻浮提に於て没して彼天に生するや佛優婆離に告げ玉はく彌勒先つ波羅捺國劫波利村婆々利大婆羅門の家に於て生し劫後十二年二月十五日日本の生處に還て結伽趺坐して滅定に入るが如く身紫金色光明豔赫として百千の日の如し上て兜率陀天に至る其身金剛鐵金の像の如し動せず揺せず身の圓光の中に首楞嚴三昧般若波羅密あり宗義炳然たるあり時に諸の人天尋て即ち爲に衆寶妙塔を起て、舍利を供養す時に兜率陀天七寶臺内摩尼殿上の床坐忽然として化生し蓮華の上に於て結伽趺坐す身は閻浮檀金の色の如し長け十六由旬三十二相八十種好皆悉く具足す頂上に肉髻髮紺瑠璃色なり釋迦毘楞伽摩尼百千萬億甄叔迦寶以て天冠を嚴る其天の寶冠百萬億の色あり一

々の色の中に無量百千の化佛あり諸の化菩薩を以て侍者とす復た他
 方の諸大菩薩あつて十八變を作す隨意自在にして天冠の中に住す彌
 勒の眉間に白毫相の光あり衆光を流出して百寶色と作す三十二相の
 中に五百億の寶色あり一々の好に亦五百億の寶色あり一々の相好艶
 出す八萬四千の光明雲を諸の天子と各々花座に坐し晝夜六時常に不
 退轉地法輪の行を説く一時を經中に五百億の天子を成就して阿耨多
 羅三藐三菩提を退轉せざらしむ是の如く兜率陀天に處して晝夜恒に
 此法を説て諸の天子を度す閻浮提の歲數五十六億七千萬歳にして爾
 して乃ち閻浮提に下生す彌勒下生經に説が如し佛優婆離に告玉はく
 是を彌勒菩薩閻浮提に於て没して兜率陀天に生する因縁と名く佛滅
 度の後ち我が諸の弟子若し慇懃にして諸の功德を修して威儀闕けむ

塔を拂ひ地を塗り衆の名香妙華を以て供養し衆の三昧を行し深く正
 受に入り經典を讀誦するあらば是の如き等の人は應に至心なるべし
 結を斷せずと雖も六通を得るが如し應に念を繫て佛の形像を念し
 彌勒の名を稱すべし是の如き等の輩は若し一念頃にも八齋戒を受け
 諸の淨業を修し弘誓の願を發せば命終の後ち譬へば壯士の臂を屈申
 する頃の如く兜率陀天に往生することを得蓮華の上に於て結伽趺坐
 す百千の天子天の伎樂を作し天曼荼羅華摩訶曼陀羅華を持して以て
 其上に散し讚して言く善哉々々善男子汝も閻浮提に於て廣く福
 業を修して此處に來生す此處を兜率陀天と名く今此天を名て彌勒と
 曰ふ當に歸依すべし聲に應して即ち禮し禮し己て謗かに眉間白毫相
 の光を觀し即ち九十億劫の生死の罪を超越することを得是の時に菩

薩其宿縁に隨て爲に妙法を説て其れをして堅固にして無上道を退轉せさらしむ是の如き等の衆生若し諸業を淨め六事法を行せば必定して疑なく當に兜率天上に生して彌勒に値遇あるを得へし亦彌勒に隨て閻浮提に下て第一に法を聞き未來世に於て賢劫一切の諸佛に値遇し星宿劫に於て亦諸佛世尊に値遇し奉ることを得諸佛の前に於て菩提の記を受く佛優婆離に告玉はく佛滅度の後ち比丘比丘尼優婆塞優婆夷天龍夜叉乾闥婆阿修羅迦樓羅緊那羅摩睺羅伽等の是の諸の大衆若し彌勒菩薩摩訶薩の名を聞くことを得ることあらん者聞き已て歡喜し恭敬し禮拜せば此人命終して彈指の頃の如く即ち往生を得ること前の如く異なることなし佛優婆離に告玉はく若し善男子善女人諸の禁戒を犯し衆の惡業を造るに是の菩薩大悲の名字を聞いて五體を地

に投げ誠心に懺悔せば是の諸の惡業速に清淨を得未來世の中に諸の衆生等の是の菩薩大悲の名稱を聞いて形像を造立し香花衣服繪蓋幢幡に禮拜し繫念せば此人命終せんとする時彌勒菩薩眉間の白毫を大人相の光を放て諸の天子と共に曼荼羅華を雨らし來て此人を迎ふ此人須臾に即ち往生を得彌勒に値遇し奉る頭面に禮敬す未だ頭を擧げざる頃に便ち法を聞くことを得て即ち無上道に於て不退轉を得未來世に於て恒河沙等の諸佛如來に値ひ奉ることを得佛優婆離に告げ玉はく汝ち今諦に聽け是の彌勒菩薩未來世に於て當に衆生の爲に大歸依處と作るべし若し彌勒菩薩に歸依することあるものは當に知るべし是の人は無上道に於て不退轉を得彌勒菩薩多陀阿伽度阿羅訶三藐三佛陀を成する時是の如き行人彼の光明を見て即ち授記を得佛優婆離

に告玉はく佛滅度の後ち四部の弟子天龍八部鬼神若し兜率天に生せんご欲するものあらば當に是の觀を作し念を繋けて思惟して兜率陀天を念すべし佛の禁戒を持すること一日より七日に至り十善を思念し十善道を行し此功德を以て廻向して彌勒の前に生せんご願ふ者は當に是の觀を作すべし是觀を作す者は若は一の天人を見一の蓮華を見るに若し一念の頃に彌勒の名を稱せば此人千二百劫の生死の罪を除却す但だ彌勒の名を聞き合掌し恭敬せば此人五十劫の生死の罪を除却す若し彌勒を敬禮することある者は百億劫の生死の罪を除却す設ひ天に生せざるも未來世の中に龍華の菩提樹下に亦值遇し奉ることを得て無上心を發す是語を説玉ふ時無量の大衆即ち座より起ち佛足を頂禮し彌勒の足を禮し佛及ひ彌勒菩薩を百千遍すまた道を得さ

るもの各誓願を發す我等天人八部今佛前に於て誠實の誓願を發す未來世に於て彌勒に值遇し此身を捨し已て皆兜率陀天に上生することを得んご世尊證して曰はく汝等及ひ未來世福を修し戒を持するもの皆當に彌勒菩薩の前に往生して彌勒菩薩の爲に攝受せらるべし佛優婆離に告給はく是觀を作すものは名けて正觀と爲す若し他觀の者は名けて邪觀と爲す爾の時に尊者阿難即ち座より起て手を叉へ長跪して佛に白して言く世尊善ひ哉世尊快く彌勒所有の功德を説き亦未來世福を修する衆生得る處の果報を證し玉ふ我今隨喜す唯然り世尊此法の要云何が受持し當に如何が此經に名くべし佛阿難に告玉はく汝ち佛語を持して慎て忘失することなかれ未來世の爲に生天の路を聞き菩提の相を示して佛種を斷つことなかれ此經を彌勒菩薩般優槃と

名く亦觀彌勒菩薩生兜率陀天勸發菩提心と名く是の如く受よ佛此語を説き玉ふ時他方より來會する十方の菩薩首楞嚴三昧八萬億諸天菩提心を發す皆彌勒に隨從して下生せん願ふもの佛此語を説き玉ふ時四部の弟子天龍八部佛の説玉ふ所を聞て皆大歡喜して佛を禮して退く

佛説觀彌勒上生兜率陀天經

以上御經を御話しましたか次に眞言のこを御話致します眞言には先つ慈氏菩薩根本陀羅尼と云がありなうばあらたんなう。たらやあや。なうまく。ありやばろきてい。じんばらや。ほうじさこばや。まかさこばや。まかさやうにさやや。たにやたをん。まいたれい。まいたららなう。せひ。まいたら

さんばい。まひごろうごばんべい。まかまんまや。そわか。

小呪を出さば左の如し

をんばい。たれいや。そわか

以上眞言を出しましたか此尊の種子はハイ字でありますハイ字は乗の義にて萬法を一心に乗すると云義であります意は慈氏彌勒菩薩は一切衆生を載せて龍華の春に濟度せしめ玉ふの意味であります

第三誓願功德

以上御經と眞言のこを御話致しましたが是より此尊の誓願を御話し致します處で此尊は當來三會の導師君界五濁の補處慈悲萬行の薩埵隨宜益物の能化にして釋尊已に此尊に遺囑して滅後の衆生を引攝救護せんことを約し玉ふが故に此尊亦釋迦の付囑を受け一種一念花

香供養するものは皆な當來下生の時に於て機に隨ひて引導せんこの
 大慈大悲が此尊の御誓願であります今上生經の文を擧げて之を證せ
 ん若し精勤して諸の功德を修し威儀闕て塔を掃ひ地に塗り華香を以
 て供養し諸の三昧を行し經典を讀誦することあらんに是の如くの人
 等結を斷せずと雖も六通を得るが如くならん應當に繫念して佛の
 形像を念し彌勒の名を稱すべし若し一念の頃も八齋戒を受け諸の淨
 業を修せば命終の時即ち兜率天上の蓮華臺中に往生することを得ん
 ごあります實に彌勒菩薩の誓願功德は我等當來の導師として廣大深
 重なるものであります
 是より親しく其御利益を蒙りし人々の御話を致して存略致します
 先づ印度烏長那國の麗羅門の中にある精舍彌勒菩薩木像の感應を御

話致します昔し北印度烏那國達麗羅川の中に精舍あり木に刻める彌
 勒の像金色にして靈異長け十丈餘あり佛滅度の後ち末由地大阿羅漢
 の所造なり尊者此念を作して釋迦滅度の弟子を以て遠く彌勒三會に
 應ずる者は釋迦遺法の中の一稱南無の者一博施食の人なり菩薩兜率
 に上生せり衆生何に依て眞容を見ん但た恐くは像を造て其體に似ず
 即ち神力を以て工匠を携へ引きて兜率天に上り面たり眞相を見るこ
 と三返以後方に造功を就す在天の時彌勒末由地に造て言く我は天眼
 を以て三界大千世界を閱觀見して其中に我像を造することある者は
 密かに青衣を遣して冥に其功を資く彼の人決定して惡趣に墮せむ我
 成佛の時其像前導となして我處に來至せん爾の時讚めて言く善ひ哉
 汝等衆生釋迦の正像末に我相似の像引ひて我所に來至せしと爾の時

像虚空に昇り光を放て偈を説く者は涕を流して三乗の道果を得ん末由地恭しく旨海を受けて功乃ち畢る自ら佛法僧法東土に流ふることあり

又晋の濟陽江夷彌勒の像を造る感應のこゝを御話せば晋の世に有難國の戴遼字は安道達が第二子願字は仲若素より顔淵澹雅好丘國既に幽眞を負荷す亦志を繼ぐこゝ巧なり達毎に像を製して共に參慮す濟陽の江夷少時より願と友たり夷嘗て頼み托して觀世音の像を造らしむ力を致して思を慇にして美を盡さしめんこゝなし後ち夢に人あつて之に告げて曰く江夷觀音に於て加ふるこゝなし改めて彌勒菩薩を爲るべしと云ふ戴即ち手を停めて書を馳せて江に報ず未だ發するに及ばずして江が書己に到れり戴神通を喜て即ち改めて彌勒を爲くる

是に於て手を解して妙を爲す初めより稽へ思はず光顔圓滿俄爾こゝして成る有識感悅因縁の差に非ざるを讚む

又釋の治講彌勒菩薩を造る感應の事を御話せば親の講少して出家して義學の譽あり常に兜率天に生せん願ふて兜率天宮の觀を爲し義源四卷を註す夢に青衣の童子あつて講に告て曰く師若し兜率天に生して慈氏大士を見奉らん欲はゞ方に形像を造り眞容を觀せよと云ふ覺めて即ち木を刻して像を爲す生年七十又餘にして卒す臨終の時徒衆に告て曰く我所造の像虚空の中に現す像に隨て天に生するご云へり

又釋の證明法師發願して慈氏菩薩の三寸の檀像を造る感應の事を御話せば釋の證明法師發願して三寸刻檀の慈氏菩薩の像を造て兜率天

に生せんご祈誓す上生經の抄四卷を著はして以て幽玄を明にす夢に
其像漸く長大にして金色の光明赫灼として明に謝して微笑し玉ふ願
求す將に生することを得んや否や像の言く我既に釋迦文佛大師の要
付囑を得たり念せざるすら苟も之を捨てず況や念願あるをや是の言
を作し已て本像に還歸す明秘して他人に語らむ没後に遺書の中を見
るに其感應を知る臨終の時傍の人の夢に百千の青衣の人來迎して明
天を指して去るを見るご云ふ
此外此尊の功德靈驗の因縁を話せば際限なき程あることなれば世の
善男善女希くは此利益を昔の事ごのみ思はず信心增長せられたきご
ごであります

明治四十年九月廿九日 印刷
同 年十月五日 發行

著述者 攝津國武庫郡其元村字小林 平林寺住職 廣安 恭壽

發行者 京都市寺町通五條上ル西橋詰町廿五番戶 藤井 佐兵衛

印刷者 京都市醒ヶ井通魚堀上ル佐女牛井町卅二番戶 小林 庄兵衛

不許複製

京都市寺町通五條上ル

佛教書肆 發行所 山城屋 藤井文政堂 振替口座四五九五番

御經類一切

十三佛由來

藥師如來

藤井文政堂發兌

十三佛由來目次

第一 不動明王
第二 釋迦如來
第三 女殊菩薩
第四 普賢菩薩
第五 地藏菩薩
第六 彌勒菩薩

第七 藥師如來
第八 觀自在菩薩
第九 勢至菩薩
第十 彌陀如來
第十一 阿閼如來
第十二 大日如來
第十三 虛空藏菩薩